

資料

「道徳性の発達に関する研究年報」  
(1989年版第1号～2003年版第15号)

—その時代、感じ、考え、希求した、道徳性の発達研究について、  
「巻頭言」一覧—

The Annual Report on the Study of Moral Development  
(1989, No. 1 to 2003, No. 15)

—List of “Forewords” about the research on moral development that  
I felt, thought, and desired at that time—

荒木紀幸\*  
Noriyuki Araki

日本道徳性発達実践学会は第1回大会を2002年6月神戸親和女子大学で、第2回大会を8月に京都教育文化センターで開催して以降、年1回、定期大会を続けている。因みに今年は同志社大学を会場に(2024年8月31日～9月1日)行われる予定であった(日本道徳性発達実践学会第23回同志社大会・第40回道徳性発達研究会)。しかし、台風接近のため大学が閉鎖となり急遽 Web 開催となった。また、学会誌「道徳性発達研究」は、同志社大学教授、内山伊知郎編集委員長のもとで規定に従って審査が行われ、その記念すべき第1号は2005年10月に発行された。それまでの空白の4年間は、本学会の前身である「道徳性発達研究会」が編集する「道徳性の発達に関する研究年報」がその役を果たした。かくして、学会誌「道徳性発達研究」は年1回の発行に心掛けたが、2006年、2013年、2017年、2021年ではできなかった。また2018年では採択論文が増えたことで年2回の発行となった。このように不定期な時期も見られたが、それ以外は年1回の定期発行が継続された。今年2024年の2月には、第17巻第1号を発行した。こうして我々学会員が長年に渡って行ってきた研究活動、実践活動、啓蒙活動が認められ、ここに、日本学術会議より、「日本道徳性発達実践学会」は、2024年8月30日付をもって日本学術会議協力学術研究団体として登録された。この機会に「日本道徳性発達実践学会」の前身である「道徳性発達研究会」が1989年以来取り組んできた様々な研究や活動の一端が収められている「道徳性の発達に関する研究年報」を取り上げ、その15年間の足跡を振り返ることは、今後の学会の発展を考える上で意義あることと考える。そこでここに、15年間の「巻頭言」を研究資料として集録した。

キーワード：学習指導要領、道徳性発達、コールバーグ理論、モラルジレンマ授業、神戸大震災、EQ、役割取得、心のノート、自尊感情

1989年度版(第1号) 巻頭言

1990年2月17日 教育方法講座 荒木紀幸

兵庫教育大学が開学(1980)した翌々年からこの研究方法研究室では具体的な形で道徳性の心理学の研究が始まった。研究生(院生、学部生)、附属小学校教官(専門、道徳教育)、大学教官が一体となった兵庫教育大学道徳性発達研究会(最初は道徳教育研究会と称していた)の研究組織もこの頃にできてきた(1982)。以来道徳性に

関する実践的な教育心理学研究、とりわけ、コールバーグの道徳性認知発達理論に基づく実践研究は、この研究室を中心に、着実に継続して行われて来たのである。そして、この研究会に参加し、モラルジレンマによる道徳授業を現場で実践している小中学校の先生方も毎年増えている。仲間が増えることはなんとしても心強い。また、1987年からは佐野安仁同志社大学教授を中心とする道徳教育研究グループと定期的に合同の研究会を開催できるようにこれを機に教育学、哲学、倫理学の側面からも積

\* 兵庫教育大学名誉教授

極的な理論的検討や問題提起が加えられることになり、研究が総合的な見地に立って行えるようになると共に今後の研究が発展的に益々広がっていくことが期待されるのである。

教育理論は実践に結実して、初めてその価値が明らかにされるのであって、机上の空論であってはならない。そのためには、実践研究の積み重ねが何としても不可欠であるし、批判的に検討していかなければならない。研究の成果をきちんと整理し、それらをいつでも活用できるようにしておくことも大切になってくる。これまでの研究の成果は、学会発表、教育雑誌への投稿、卒業論文、修士論文、研究紀要論文、教育研究書（荒木編『道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論とその実践、北大路書房、1988』、佐野・荒木編『道徳教育の視点、晃洋書房、1990』）の出版、等として公表されている。しかし、授業を実践した後の授業研究会や道徳教育に関わる諸問題を話し合う宿泊研修会について、そこで議論され、検討されたことの中には今後の実践研究上、重大な指摘や示唆があるにも拘わらず、これまでまとめのなまま置き去りにされていたきらいがある。それらを十分に今後の研究に生かしていけるように、記録として残すべきであろう。そのような反省に立って、本年度より、教育方法研究室を中心に道徳性の発達に関わる1年間の研究成果を詳しく取り上げ、1冊の論文集としてまとめることとした。なおこの論文集について、忌憚のないご意見ご批判を賜りますと幸いです。

今回、道徳性の発達に関する研究年報を発刊できたことは、われわれの共有財産がまた1つ増えたことを意味します。また、コールバーグ理論を実践したいと考えておられる先生方にとっても大きな力になることを期待しています。この研究集の完成を喜ぶとともに、この研究に携わって下さった多くの学究同輩、研究会の発表者、口述発表をワープロに落としてくださった多くの院生のみなさま、にお礼申し上げます。また、最後になりましたが、論文集発行に当たり、院生の高木智明、矢野幸彦氏をはじめ、編集の複雑な雑務を引き受けてくださった附属小学校教諭であり、院生でもある徳永悦郎氏にお礼申し上げます。

### 1990年度版（第2号） 巻頭言

1991年2月16日 教育方法講座 荒木紀幸

昨年創刊号を出して早いもの1年が経過した。週一度の研究会は細々と、また遅々とした動きでしかないが、ここで再びこの1年間の研究の足跡を振り返ることが出来たことをまず喜びたい。これまで多くの道徳教育実践者、研究者をはじめ、コールバーグ理論の関心のある皆様方から、この研究会に対し、また研究年報に対して温かい励ましと評価を頂いた。厚くお礼申し上げます。

この1年を振り返って見ると、やはり多彩な1年であったと言える。ざっと上げると次の様なことがあった。

1) 夏の研究会を、佐野安仁同志社大学教授のもとで同志社大学を会場に60名余りが参加して開催できた。

2) 日本道徳性心理学研究会を、この研究会が主催で兵庫教育大学を会場に開催し、翌日には附属小学校で公開授業を行った

3) 日本教育心理学第32回大会の道徳性シンポジウムの話題提供者として私と徳永氏が参加した

4) 第15回北米道徳教育学会・第2回国際道徳教育会議に話題提供者として私が招かれるとともに原、徳永両氏がポスターセッションに参加した

5) 同志社大学道徳研究グループと我々の研究会との合同研究会の中間のまとめとして、佐野安仁・荒木紀幸編で『道徳教育の視点』を晃洋書房から出版できた

6) これまでの研究会で開発し蓄積してきたジレンマ資料を、新学習指導要領の改定に合わせて、整理し、「モラルジレンマ資料と授業展開」小学校編・中学校編、として明治図書から出版できた

今年は、日本各地の小・中学校で道徳教育に取り組まれている先生方から、この研究会に対して、コールバーグ理論に対する単なる興味や関心を乗り越えた具体的なジレンマ資料に基づく実践について、多くの問い合わせや具体的な成果をお寄せいただく機会が昨年と比べずっと増えた。また、道徳教育関連の月刊誌や授業研究についての月刊誌で我々のモラルジレンマ授業実践が取り上げられる機会が多くなり、各方面から関心や評価を頂いている。有り難いことと感謝すると共に、着実にコールバーグ理論への理解が進み、モラルジレンマ授業実践が日本全国に広がりを見せていることが素直に嬉しい。しかし、またその分この研究会の存在意義は益々高まってきた訳で、その責任を痛感している。

今回の研究年報の中に掲載している論文には、コールバーグ理論についての、新しい展開、新学習指導要領との関わり、他の教科との関連や、我々の授業実践に対して寄せられた宇佐美寛氏の批判論『ジレンマくだけ』の検討などが含まれている。この論文集に忌憚のないご意見を賜りますれば幸いです。

過日、道徳教育の大先達でいらっしゃる平野武夫先生から段ボール2箱分のご著書を頂戴した。私はもちろん先生との面識はないし、ご著書に直接触れることもなかったので、大変恐縮すると共に感激した。先生は84歳のご高齢になられたとお聞きしたが、お電話での声は矍鑠とされていた。生涯を捧げられたオリジナルの価値葛藤論とコールバーグ理論との関わりから我々の研究が他人事に思えないことなどを話され、私たちの研究活動を激励して下さいました。有り難いことと拝聴しながら、我々にとって身に余る宿題を頂いたと思っている。勿論微力ですが、ご期待に添えるよう一層研究と実践に精進したい。

最後になったが、この年報の出版に際して私のゼミの

多くの院生の皆様が協力してくれた。厚くお礼申し上げる。

### 1991年度版（第3号） 巻頭言

1992年2月6日 教育方法講座 荒木紀幸

創刊号で、「教育理論は実践に結実して、初めてその価値が明らかにされるのであって、机上の空論であってはならない。そのためには、実践研究の積み重ねが何としても不可欠であるし、批判的に検討していかなければならない。研究の成果をきちんと整理し、それらをいつでも活用できるようにしておくことも大切になってくる。…略… 授業を実践した後の授業研究会や道徳教育に関わる諸問題を話し合う宿泊研修会について、そこで議論され、検討されたことの中には今後の実践研究上、重大な指摘や示唆があるにも拘わらず、これまでまとめのないまま置き去りにされていたきらいがある。それらを十分に今後の研究に生かしていけるように、記録として残すべきであろう。」と、この年報の意義を述べたが、その成果が少しずつ表われてきたと言うのがこの一年を振り返っての実感である。

例えば、大阪教育大学森岡卓也教授主宰の道徳教育学論集(1991)第6集に掲載されている仲川進氏の論文「道徳の時間における価値の発問と事実の発問」では、われわれの実践研究を手がかりにコールバーグ理論が検討されている。明治図書発行の月刊誌「道徳教育」や「道徳授業研究」、学事出版の「授業づくりネットワーク」等で日本各地の先生方のジレンマ授業実践例が報告されるようになった。また、『われわれのやり方に刺激を受け、ジレンマ授業をやってみます。』と研究会で挨拶をされたり、お手紙を頂くことが増えたり、ジレンマ資料の作成や道徳性の測定についての問い合わせも多くなった。

とりわけ学校ぐるみでジレンマ授業に取り組む広島県福山市の道上小学校（藤田松太郎校長）や島根県太田市の太子町立太田小学校（原田敏隆校長）、兵庫県宝塚市宝梅中学校（羽瀧強一 道徳主任）の道徳授業研究会に参加できたことはわれわれにとって大きな収穫であった。我々がめざしているモラルジレンマ道徳授業、学ぶ子どもにとっても、教える先生にとっても、実のあるおもしろい授業が少しずつ現実のものとなっていることが、授業を通してヒシヒシと伝わってきたからである。

兵庫教育大学道徳性発達研究会のメンバーであるが、社の地を遠く離れて実践している研究同人から、昔は、『オープンエンドのジレンマ授業の良さがなかなか分かって貰えません。四面楚歌でとても苦労しています。』といった苦渋に満ちた便りを受け取ったものだが、最近嬉しき便りが届くようになった。一、二ご紹介しよう。沖縄の新垣千鶴子先生からは、『…沖縄の教育課程研究会、道徳教育九州大会で、コールバーグ理論、モラルジレンマの資料集を活用した研究実践報告がみられ、理論

が沖縄、九州へと広まりつつあります。…略… 琉大の授業で、従来型とコールバーグ理論による授業を実際の授業のVTRを見せて、発問、指導過程について比較させ、書かせたところ、圧倒的にコールバーグ理論の支持が多かった。感想の内容がとても素晴らしかったので、結果をまとめて送りたいと思います。』とありました。また、鹿児島県大島教育事務所の丸山屋敏先生からは、『大島でもモラルジレンマの授業があちらこちらで見られるようになりました。先生の著書も大島の書店に並んでいます。私も先生の著書に行く先で紹介しています。…略… 今年は是非大島でジレンマ資料を作りたいと思っています。』という便りを頂いた。

しかし、一方で、コールバーグ理論叩き、兵庫教育大学方式の授業批判も月刊誌の紙面を賑わしている。ジレンマの解決が二者択一で固定的だとする批判が多いように思うが、われわれは1つに、学力観、児童観の違いと言うように考えている。われわれはジレンマを通して、それぞれの道徳的な価値についてじっくりと深く、広く、考えさせたいと願っている。そのために多くの授業で二者択一的に考えさせている。それに道徳の時間は、日常一般に見られる折衷的思考の時間や取りつくりの問題解決のための時間であってはいけな思っている。

兵庫教育大学道徳性発達研究会の提唱する授業方式が広く行き渡って行くと、どうしても授業の形骸化、マンネリ化の問題が起こってくる。そうならないためには、先ずもって、我々相互の自己啓発に努めなければならない。この種の授業の実践について広く情報交換することであろう。この年報がそのような役目を少しでも果たせ、道徳の授業の充実にご与えを願ってやまない。

### 1992年度版（第4号） 巻頭言

1993年7月1日 教育方法講座 荒木紀幸

学習指導要領が改訂になって4年、全面実施されて1年が経った。文部省は「21世紀に向けた教育改革の最大の柱の一つ」と位置づけた改訂の目玉である道徳教育について、現場でどのように推進されているかの調査を全国の国公私立の小・中学校約3万6千校を対象に行うことを6月21日に発表している。

道徳教育における注目すべき改訂には、内容項目を4つの視点から再構成し、その重点的な指導を子どもの発達特性に応じながら適時性をもって行うといったことがらがある。教師の授業における自由度も大幅に認められ、指導において価値の押し付けに陥らないように戒められた上で、1主題1時間にこだわらないで授業を展開したり、年間を通じて地域の特性や子どもの実態に応じて重点的な特定の価値を選択し、指導するといった弾力的な運用が認められている。最近、新指導要領に合せて、文部省は新しく道徳資料を作っている（文部省版「読み物

資料とその活用、道徳教育推進指導資料]が、その有効性と限界を論じる機会があった(「道徳授業研究(明治図書)1992年1・2隔月号)。これまで批判を受けてきた心情主義の授業に代る新しい指導法の提案や工夫、新趣向の読み物資料を期待していたが、その中味は旧態依然とした内容であり、改善を認めがたいものであった。

指導書では道徳性の発達段階や発達特性を踏まえた上で、人間としての生き方に重点を置いた指導の必要性が説かれているが、それが具体的に何を指しているかが明らかでなく、道徳性の発達の機序についてもなんら説明がない。大方の現場教師はどのように授業を組み立て、道徳性を高めていけばよいかについて十分な知識や方法を持っていない。そこで新道徳教育を推進するに当たって、我々の進めるモラルジレンマ授業が文部省の考える新しい道徳教育を展開する上で、どのように貢献できるかを明らかにしておくことがこの時期必要であろう。

結論から言って、我々が推し進めている道徳性認知発達理論に依拠するジレンマ授業の特質と今回の学習指導要領で述べられた道徳教育との間に多くの共通点を見出すことができる。そこで少し長い引用になるが、平成元年に告示された学習指導要領改訂のねらいと基本方針を熱海則夫・菊川 治編による解説書(改訂小学校学習指導要領の展開 総則編, 1989 明治図書, 14~20)から、「総則」改訂の基本方針の記述を以下に取り上げた。

「…これからの社会の変化とそれに伴う幼児児童生徒の生活や意識の変容に配慮しつつ、生涯教育の基礎を培うという観点に立ち、21世紀を差し社会の変化に自ら対応できる心豊かな人間の育成を図ることを基本的なねらいとし、次の方針に基づき改訂した。今回の改訂の基本方針は、4つの事項にまとめられているが、これらは相互に関連し混然一体をなすものとして理解される必要がある。…略…」

以下には小学校学習指導要領の改訂の方針を中心にその考え方を述べることにする。

### (1) 心豊かな人間の育成

(1) 教育活動全体を通じて、児童の発達段階や各教科等の特性に応じ、豊かな心を持ち、たくましく生きる人間の育成を図ること。…略…

今回の改訂においては、道徳を中心にして、各教科や特別活動においてもそれぞれの特質に応じてこれらの指導を充実させるために、内容や指導方法の改善を図ることとした。すなわち、道徳については、それらの諸点に配慮して児童の道徳性の発達等に応じた内容の重点化を図り道徳性がしっかり身に付くように指導できるよう配慮した。道徳教育については、その現状が形骸化の傾向にあるとか、いわゆる徳目主義に偏っているなどの指摘があるので、今回の改訂においては、総則において、豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性を養うことを強調した。また、各教科の学習指導においては、その内容を身に付ける過程において自主的、主体的に学習

や生活をする力を育てるようにするとともに、その学習を通して習得した知識や能力などが児童の道徳性の育成にも資するようにすることが大切である。

特に、今回の改訂においては、これからの社会の変化に主体的に対応して生きていくことができる、自分の生き方についてしっかりした考え方をもった人間の育成が求められている。そのためには、小学校の児童は、他律的な道徳を主とする段階から自律的な道徳を発達させる時期にあるので、人間としての在り方についての指導の充実を図るとともに、自分の生き方に徐々に目を向けるようにすることが大切である。…略…

### (2) 基礎・基本の重視と個性教育の推進

(2) 国民として必要とされる基礎的・基本的な内容を重視し、個性を生かす教育を充実するとともに、幼稚園教育や中学校教育との関連を緊密にして各教科との内容の一貫性を図ること。…略…

個性を生かすためには、児童一人一人が自分のものの見方や考え方をもつようにすることが大切であり、今回の改訂においては、各教科において思考力、判断力、表現力などの能力の育成を重視した。また、豊かな個性の形成は、内発的な意欲や主体的な態度に支えられる必要があり、自ら学ぶ意欲や主体的な学習の仕方を身に付けさせることも大切である。このように個性を生かす教育は、基礎的・基本的な内容を身に付けさせる過程を通して、さらにそれを基盤として、児童一人一人が個性を発揮しつつ生きることができるよう育てることを目指していると言えよう。…略…

### (3) 自己教育力の育成

(3) 社会の変化に主体的に対応できる能力の育成や創造性の基盤を培うことを重視するとともに、自ら学ぶ意欲を高めるようにすること。…略…

また、今回の改訂においては、生涯学習の基礎を培う観点から、学ぶことの楽しさや成就感を体得させ自ら学ぶ意欲を育てるため体験的な学習や問題解決的な学習を重視して各教科の内容の改善を行った。各教科の学習指導に当たっては、自ら学ぶ目標を定め何をどのように学ぶかという主体的な学習の仕方を身に付けさせることが大切である。

### (4) 文化と伝統の尊重と国際理解の推進

(4) 我が国の文化と伝統を尊敬する態度の育成を重視するとともに、世界の文化や歴史についての理解を深め、国際社会に生きる日本人としての資質を養うこと。…略…

外国の文化や歴史についての学習は、主として中・高等学校で行うこととしているが、今回の改訂においては、小学校段階から外国の文化や歴史に対しても目を開くように配慮し、社会科を中心に関連の教科等の内容の改善を図ることとした。外国の文化や歴史の指導に当たっては、相手の立場や発想に立って理解することができるようになることが大切である。また、そのことによって、

我が国の文化の特質と伝統に対する関心や理解が一層深められるとともに、これを尊重する態度が養われるものとする。…略…」

以上の記述の中で、今回改訂となった道徳教育のキー概念やキー表現とみなすことができ、かつわれわれの提唱するジレンマ授業の特徴と関係の深いと思われる表記として、次の10個（    部分）を以下にあげた。

- ①『個性教育』
- ②『自己教育力』
- ③『国際理解』
- ④『児童の発達段階に応じた、…略…児童の道徳性の発達等に応じた指導』
- ⑤『個性を生かすためには、児童一人一人が自分のものの見方や考え方もつようにすることが大切』
- ⑥『各教科の学習を通して習得した知識や能力などが児童の道徳性の育成にも資するようにする』
- ⑦『自ら学ぶ意欲を高めるようにすること』
- ⑧『体験的な学習を重視』
- ⑨『問題解決的な学習を重視』
- ⑩『外国の文化や歴史の指導に当たっては、相手の立場や発想に立って理解することができるようにする』

次に、モラルジレンマ授業の特性と以上の10キー概念ないし表記の関連を見ていくことにしよう。

われわれはジレンマ授業を、「道徳的葛藤（モラルジレンマ）を集団討議によって解決に導く過程を通して、児童生徒一人ひとりの道徳的判断力を育成し、道徳性をより高い発達段階に高める」ことと考える。ここでは、児童・生徒の道徳性の発達や発達の個人差（④）、一人ひとりが自分のものの見方や考え方を大切に（⑤）、それらを伸ばす授業が行われる。そろえる教育ではなく違える教育が志向されている。その意味でジレンマ授業は個性教育（①）とすることができる。なお、コールバーグの定義による3水準6段階の道徳性発達段階の考え方は発達の個人差を表わす上で現在もっとも信頼のおける発達段階同定の物差しとして利用できるもので、大いに参考にして頂きたい。

モラルジレンマ資料を用いる授業の意義として、「学習意欲の喚起—道徳的問題解決への内発的動機づけ（⑦）」「集団討議にもとづくより高次な認知的葛藤の出現」「問題解決のための認知方略（役割取得の積極的な利用）の学習（⑨）」を指摘できるとともに、このような授業を継続することにより、道徳的な問題に対する子どもたちの感受性を高めることができる。例えば、この点についておもしろい調査を植田和也（1992）が行っている（修士論文、コールバーグ理論に基づく小学校道徳授業の実証的研究）。彼は120人の6年生について4主題のモラルジレンマ授業を受ける前と後とで「道徳」に関するイメージを比較している。つまり授業に先立つ道徳授業イメージ調査から従来型の授業の特徴を、一連のジレンマ授業を受けた後での授業イメージ調査からジレンマ授業の特

徴を取り上げている。以下がその結果である。

- 1) 道徳授業についてイメージすることができなかった児童は従来型授業で8名もみられたが、ジレンマ授業については皆無だった。
- 2) 従来型では楽しい、面白いといった肯定的なイメージは17個に過ぎなかったが、ジレンマ授業では3倍の53個もみられた。一方つまらない、いやだといった否定的なイメージは従来型では21個もみられたのに対して、ジレンマ授業では皆無であった。
- 3) ジレンマ授業では自分の力で考えなければならないが、従来型の授業では必ずしもその点は意識されていなかった。

授業のイメージ調査で明らかになったことは、ジレンマ授業が分りきったことを先生から教わる従来のタイプの授業と異なって、自分から主体的に考え、他者と相互作用しながら独自の学習活動を楽しめる場と子どもたちがとらえていたこと（①・②・⑤・⑦）、またジレンマそのものが興味や好奇心をかき立てる道徳的な問題であると受け止めていたこと（⑦・⑨）、等である。このように、モラルジレンマ授業が従来の授業と違って、文部省の期待する新しい学力観に基づく自ら意欲的に考える学習を成立させていたこと（①・②）、児童の道徳性の発達に有効な場（④）であること、等を児童のことばかりから明らかにしたとすることができる。

ところで、これまで機会あるごとに説明してきたように、道徳性は、(a) 認知能力と (b) 役割取得能力の2つの能力の発達と結びついて発達していく。認知能力の発達だけでは、つまり知的に優れているだけでは道徳性は高まらない。認知能力は「世界を知り、自分と世界との間の適応を図る（均衡化）知的な能力」をいう。これに対して、役割取得能力は「自分の考えや気持ちと同等に他者の考えや気持ちを受入れ、調整してそれらを対人交渉に生かす能力」をいう。授業ではこれらの2つの能力の発達に着目しながら道徳性を高めるべく配慮していかなければならない。認知能力を刺激するためには「道徳的・認知的葛藤の経験」が最適であり、葛藤の解決のためにはそれぞれの子どもの「役割取得能力」に合わせた「役割取得の機会」を導入することが大切である。役割取得能力の発達は自分が自分を大切にするように自分以外の他者をも大切に扱う能力を高め、人間関係の広がりをもたらずだけでなく、社会認識の発達に関係し、その発達如何が道徳判断の質に影響していく。従って、授業において道徳的な不均衡の状態を作るために、我々が一貫して主張してきたことは一つに、オープンエンドのモラルジレンマ資料で考えさせることであり、一つに、自己の考えや期待と矛盾する他者の視点を意図的に取り入れ、それらを統合して解決を図る「役割取得の機会」を個人の思考過程に組み込むことである。以上のように、子どもたちはモラルジレンマの解決を繰り返し考える中で、主人公の立場や他の登場人物、仲間の立場からだけ

でなく、社会や制度といった抽象的な視点からも考える思考方略を身につけていくのである。

なお「役割取得」の考え方は国際理解教育を進める上でも利用できる重要な考え方である(③)。特に単一民族として成長、あるいは生活してきた日本人にとって外国という異文化を理解したり、外国人を理解することは難しい。異文化を題材とした道徳的価値の選択を迫るジレンマ授業や役割取得の機会の積極的な授業への導入は文化や歴史の学習を通じた人間理解教育を促す(⑩)。また、道徳教育で扱う「生き方」の問題は社会認識や自然認識とかがためて、個人の中で統合されなければならない。その意味で、道徳教育を他教科と関係づけることが重要であり、十分な教科の知識や事実の認識を必要とする(⑥)。同様に各教科の学習においても人間理解、人としての生き方、人間関係や社会生活が問題にされることが多い。そのような場合、「役割取得の機会」を授業に取り入れることにより、学習者の人間をとらえる視点を広げ、教科学習の理解を深めることが可能である。例えば、先導的な試みとして、われわれは社会科や理科での環境学習の中で役割取得の機会を積極的に導入し、学習効果をあげた研究をこれまでに報告してきた(⑥)。

総則の中で、豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるように配慮しなければならないとして、体験学習が強調されている。これは、道徳の時間の中に体験学習を持ち込もうというのではなく、生活科を意識してのことであろう。というのは子どもには、自分自身の体や手足を使ってまわりの世界や仲間と交渉し、そのような活動の中から、自分や他者について、集団生活について、あるいは社会のルールや自然の秩序について、偶発的、無意図的であるが、もっとも効率よく学んでいく最適な時期があるのである。このような体験学習が得意な時期は道徳性の発達段階からいうと、幼児期から児童期のはじめにかけての時期、つまり自己中心性の支配の強い直観的思考の時期、あるいは具体的操作期に入り、自己中心性の脱却がはじまる時期である。生活科という集団活動を通して偶然の機会に個人の道徳性を高めることができれば、そのような体験はこの時期の子どもそれぞれにとって価値のある経験と言えるだろう(⑧)。このような意味で道徳教育において体験学習(生活科での道徳学習)は重要である。

以上のように、われわれの推し進めるモラルジレンマ授業は子どもの道徳的自律を促すための授業方法であり、新しい指導要領に基づく道徳教育を実践していく上で多くの示唆や手がかりを含んでいる。ジレンマ授業の実践が日本のすみずみまで広く行き渡ることを願ってやまない。

この1992年度版の年報出版が私の海外出張のために、半年遅れとなったことお詫びします。道徳性発達研究会の堀田泰永、植田和也、魚住知代さんをはじめ、研究室の皆さんのご協力今年1月の段階には、「巻頭言」を

除いて印刷が全て刷り上がっていました。厚くお礼申し上げます。

### 1993年度版(第5号) 巻頭言

1994年3月3日 教育方法講座 荒木紀幸

昨年文部省の在外研究員として、アメリカ・カナダに2月から4ヶ月のあいだ、出かけましたが、アメリカ・カナダへは2つの目的があって参りました。1つは、勿論道徳教育に関わることです。具体的には、コールバーグ博士の後継者の先生方を訪ね、研究の動向を知ることであり、われわれの研究の輪を広げることです。もう1つは、わたしのライフワークの1つである不安研究をより発展させるためです。4ヶ月の間に、まずフロリダ州タンパにある南フロリダ大学のスピルバーガー博士(1991~1993年アメリカ心理学会会長)のもとに約40日間滞在し、その後はだいたい1箇所3週間程度の滞在で4つの大学を巡ってきました。

4ヶ月の間に2つの国にまたがって、英会話苦手なわたしが、5箇所の地を訪れたことは今から考えると冷や汗ものですし、事故に遭わなかったことが不思議な気さえします。日本にいるときにこの際だからという気持ちが強くて計画がどんどん膨らんでしまったのですが、海外で生活してみて、非常に欲張りな計画だった反省しました。渡米した当初、本当に成果を上げて帰国できるのだろうか心配になったものです。

さて、先ず新しい訪問先に着くと、できるだけ早くその土地や大学の様子を知り、その環境や生活に慣れようとししました。研究室と宿舎と食堂やブック・ストアーの地理関係や町の治安の状態、訪問した先生の大学における人間関係や研究環境、等々を知らなければ、何も始まりません。初めのうちは、電話をかけるにしる、料理を注文するにしる、論文のコピーを取るにしる、とにかく何をしても無駄が多く、あれよあれよという間に1日が過ぎてしまいます。日本にいるときと大違いで、見知らぬ土地では疲れ方に拍車がかかります。そんな訳で、わたしは訪問した土地に慣れるのにだいたい1週間が必要でした。また次の訪問地に向かう4、5日前になると、気持ちを切り替えて、新しい土地についての情報の収集を始めなければなりません。このように1箇所に20日滞在したとして、研究資料の収集や情報交換、学校訪問など、研究に打ち込めるのは正味10日間といったところでした。

少し大げさですが、わたしにとって、この120日にわたる行程は1日、1日が新しい環境への適応、適応への挑戦でした。また、知らない土地にいるという『緊張感、ストレス、不安感』は心のどこかに常にありましたが、コミュニケーションがうまくいかないことも大きなストレス源になっていたと思います。

最初の訪問地、タンパに来て2日目には、自動車のハンドルを握りました。運転の覚悟はできていたのですが、やはり交通ルールや道路環境が全く日本と違っており、運転は脅威そのものでした。最初は息子がナビゲートしてくれたから切り抜けたようなものです（息子は大学が春休みで一緒に渡米し、30日ほどホテル住まいをしました。その間、息子は10日間ほど、カナダヘスキー旅行に出かけています）。アメリカは広大でフロリダでの走行距離は2624マイル（4198km）になりました。また、日本にいたときは1日10km、15kmと歩くことはなかったのですが、アメリカ、カナダでは、長く歩くことがわたしの生活の基本になりました。このように、渡米したすぐさまから、生活は全く激変しました。このような変化がストレス症状を引き起こさないはずはありません。

日本を出て1週間近くたった頃から、左足の親指が腫れてきて、痛みで普通に歩けなくなりました。日本を出る3ヶ月前に急性痛風の治療を済ませたところなので、これがストレスによる痛風症状の現れとすぐ気が付きました。ついに2月10日、記念すべきわたしの誕生日に、山田恒夫（現放送大学教授、阪大心理学教室の長期研究生）、清水（SFC 生理心理学助教授）両先生を介して、開業医の Doctor's Walk-in Clinic で診察を受けました。処方箋の痛み止め薬をドラッグストアでもらって、3回ほど薬を飲みました。お陰で症状も消え、それ以降痛風症状は現れず、ほっとしました。このにつつき痛さがどれほどつらいものかを現わしている衝撃のエッチング絵画をトロント市立美術館で見つけました。売店でその絵はがきカードを求めましたがなく、諦めてその日は美術館を後にしました。しかし、トロントを去る前日（4月2日）もう一度、その絵はがきカードを求めて美術館に行きました。やはり売店にはなく、止むなく最後の手段、写真撮影を決断しました。この時撮った写真（右上段のエッチング絵画）には証拠のフラッシュの光が刷り込まれていました。エッチングは無残に腫れ上がった足の絵が描かれています。それは、恐ろしい形相をした悪魔が両手で足の親指当たりをしっかりと押さえこみ、噛みついて離さないエッチング絵画です。この絵画から痛風の強烈な痛さがおわかり頂けたでしょうか？

外国ににいるという不安、生活の急変、コミュニケーション不足など、常に不安やストレスにさらされていましたが、薬を飲んで後、病气らしい病気もせず、健康で、初期の目的を十二分に果たして、予定の5月31日には楽しく帰国できました。それはわたしが強靱な人格の持ち主だからでしょうか。とんでもありません。

その鍵は、わたしが行く先々でお出会った人にあります。スピルバーガー博士、パワー博士、レスト夫妻、ヴォイド博士、オニール・エヴァベーカー夫妻からは、各人各様のやり様のやり方でわたしを温かく迎え入れ、援助し、支えて下さったからです。日本にいたとき、滞在先の教授と人間関係で悩んだケースをいくつか聞か



悪魔が足に噛み、痛みの極みが描かれたエッチング  
（トロント市立美術館で）

れていたもので、行く先々で大事にして頂き、自分は実に幸せだと感じました。先生方のお人柄は、わたしたちが研究しているテーマ（道徳教育、ウェルネスアプローチ）と大いに関係しているように思いました。

南フロリダ大学では阪大の山田恒夫先生、ノートルダム大学では、院生の藤本哲史夫妻（現同志社大学教授）、丸田祥一さん、ミネソタ大学では院生の森昌子さん、UCLA では同僚の畑野裕子さん達が、それぞれ現地で快く私を迎えて下さったので、大いに助けられたことは言うまでもありません。特にトロントでは山根先生（現神戸親和大学理事長）のアパートに転がり込み、お世話になりました。また、訪問先では師事した先生方を介して、ほんとに大勢のアメリカ人、カナダ人、留学中の各国の研究者と親しくなり、またお世話になりました。『アメリカ・カナダにおける道徳教育―帰国報告』の中でも述べたように、多くのことを学ぶことができました。志を同じくする人との間で広まった輪、お世話になった方との輪、この一期一会を大切にしたい。

帰国後間もなく、研究交流はいくつか実現しました。7月に UCLA のステエグラ博士の依頼で日米の算数教育比較調査を行った。8月にはスピルバーガー博士を囲む会議を日光で開き、兵庫教育大学岩脇教授も参加され、日本での不安や怒り尺度の共同研究をはじめることになりました。10月にはボイド博士の来日で、附属小の徳永先生にモラルジレンマ授業の見学をお願いし、日本道徳性心理学研究会での講演を企画しました。なお研究会では、コールバーグ博士の研究助手だったカリフォルニア大学バークレー校教授のテュリエル博士（高弟のラリー・ヌッチ教授、カリフォルニアバークレー校、を神戸親和女子大学に2010年以降約10年にわたって招聘）と親しくなり、京都市内の観光を案内しました。ボイド博士とテュリエル博士から頂いた論文は森川智之氏と共同執筆した異文化教育研究（現在印刷中）で参考に致しました。このような交流の輪が少しずつでも広がっていからと思っています。

ところで、私たちの研究に対する関心の広がりには目を見張るものがあります。帰国後、国内外の小・中学校からはモラルジレンマ授業の問い合わせを受け、授業研究に参加させていただく機会が急に多くなりました。有難いことです。

今年度の研究会の活動状況やジレンマ授業実践校の紹介をご覧になればお分かりと思いますが、文部省指定の研究授業でたくさんの先生方がモラルジレンマ授業をなさってくれています。大変力強く、われわれも皆さんの期待に添えるようにこれからも研究を楽しみながら進めて行きたいと思ひます。



トロント大学ポイド博士と山根先生(現神戸親和大学理事長)と喫茶店で



日能研学習評価研究所  
1990年7月20日  
第9回国際教育セミナー会場



南カリフォルニア大学  
O'NEAL 教授の研究室で



Yes プログラム高校見学で、3人の専任教員とパワー博士



南フロリダ大学で



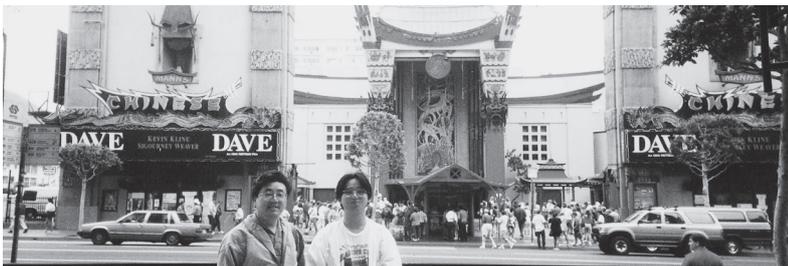
岩脇教授とスピルバーガー博士



レスト夫妻とレストランで(空港に迎えに来て頂いた日)



パワー家族と  
ニコラス博士



院生の森川氏とロサンゼルス, ハリウッド通り



レスト博士とドロシア博士夫妻

**Dr. Charles Spielberger Keynote Speaker at ICP Nikko Conference**  
By Machiko Fukuhara, Tokiwa University, Japan



On the occasion of the International Congress of Health Psychology held in Tokyo, Japan, July 26 - July 30, to which Dr. Charles Spielberger was invited as a keynote speaker, some ICP members convened in Nikko, July 31 - August 1 for a conference there. The meeting was a stimulating one, rather informal, but was basically academic and professional. Two speakers presented papers: one was on "STAI," prepared by Dr. Tadashi Hidano (Professor Emeritus, University of Tokyo), and the other was on "Children's Test Anxiety," by Professor Noriyuki Araki (Professor, Hyogo University of Education). Both of them dealt with the innovations of Dr. Spielberger, whose talks on these subjects were very much appreciated.

A great deal of research is going on in Japan concerning his Anxiety Scales and STAXI. Dr. Spielberger wants to see systematic studies on their respective scales, probably by

写真最後列がスピルバーガー、その左前は祐宗広大、右前は肥田野東大、前列中央が福原常磐大、後方右後ろに岩脇兵教大各教授、前列左が筆者

**スピルバーガー博士を囲んで研究協議（日光）7月26-30日**

**Just Community 建設についての新しい試み、Y.E.S. プログラム**  
— Y.E.S. (your Educational Success) の概要 —

Yes プログラムは3年前、高校生（9～12年）のために作られた。通常の授業で必要とされる学習スタイルとは違う学習スタイルが必要な生徒、あるいは学習意欲がない生徒のために作られたプログラムである。こういった生徒は様々の理由で、“普通の学習環境”ではうまく適応できないでいる。Adaw High School内に作られ、Yes プログラムには公正委員会 (Fairness Committee) という裁判所の法廷がある。4人の生徒と1人の教師で構成されていて、生徒が権利を侵害されたとき、あるいは自己防衛のために、委員会に不当性の異議申し立てができ、罰則の権限も持っている。この Yes プログラムは1990～1991年に開始された。

Yes プログラムの意図は問題を抱えた高校生にうまく学べる環境を提供することにある。プログラムは生徒の自尊感情 (Self-Esteem) や自己信頼感、自己と他者への責任感を育てることをねらいとしている。

Yes プログラムの生徒は努力して、学業成績を上げ、グループカウンセリングを通して社会的な協力的行為を学び、権威と規則を取り扱って適切な方法を学ぶことで、責任ある市民としての資格を身に付けていく。Y.E.S.に参加し、Caring Staffから一貫して支持され、励まされると自己の中にプライドが育ち、学業成績を高めることができる。Y.E.S.は十代の子ども達の教育について、生徒を知的に、社会的に、情緒的に、身体的にも高めることができるという、12年生ホリスティック・アプローチ (全体的、統合論的に問題を解決する方法) に依拠している。Yes プログラムは通常の学習プログラム (SBCSC) 一学業成績を上げるもう一つの方法—とオルタナティブな関係にある。この Yes プログラムは、SBCSCの学びで多くの手助けを必要とする生徒を支持し、指導し、励ますために存在する。

(授業科目とスタッフ)

Yes プログラムは、高度に構造化されたプログラムであり、教科のコース、英語、社会、数学、理科と対応している。“家族”のようにクラスの雰囲気は良く、教え方も上手で革新的で興味深い。現在3人の専任教師と定員30人（9年生6人、10年生9人、11年生16人、12年生2人）。それに加え、パワー博士（ノートルダム大学）が委員会会合に参加。

**アメリカ・カナダにおける道徳教育—帰国報告—**

兵庫教育大学 荒木 紀幸

**研究概要**

私の在外研究の目的は大きく2つ上げられる。1つは学校教育における不安研究に関わる情報収集であり、今1つは道徳性認知発達論に立つ道徳教育研究のための資料の収集および研究協力関係を結ぶことである。ここでは道徳授業研究についてその1部を紹介したい。まず、グローバル教育、多文化社会価値教育という新しい視点から道徳教育を再考することの指摘を、コールバーグ博士の高弟であるトロント大学助教授 Dwight Boyd 氏（教育哲学、倫理学）を始め、ノートルダム大学教授 Power 博士（道徳性心理学）、ミネソタ大学教授 Rest 教授（道徳性心理学）から受けた。このことは、様々な人種（ある学校では44カ語もの言語が使われていた）の子どもから構成されているアメリカ各地、カナダ各州の、公立及び私立の幼稚園、小学校、あるいは高校を見学、参観して実感したことであり、また各大学での価値教育に関する大学院の授業や夜間の教師向け大学院での講義を受けて得た感想である。また、Power 博士の最新の著書である「Moral education and Pluralism」のシンポジウムをまとめた「Challenge of Pluralism」を頂戴することができたが、今後の道徳教育の参考にして行きたいと考えている。このようにアメリカ及びカナダの大学を広く巡る研究旅行で得たことは、我が国の今後の国際化教育を考える上で大変意義があった。また、授業における教師発問の訓練プログラムと指導をオタワ大学教授 Belanger, W 氏から直接に受けたことは、われわれの今後の教師訓練に生かすことができる。ミネソタ大学 Rest 教授の道徳的行為の4要素過程仮説を参考にして授業モデルを構想することで、モラルジレンマ資料一辺倒で行き詰っている現状を打開する手がかりを得られるとでないかと思われた。授業効果を高める方法の1つとして、道徳的な環境の整備がある。この1つの有効な方法がノートルダム大学教授 Power 博士から显示されているが、この具体的な実践プログラムを公立高校で観察したり、ジャストコミュニティのミーティングに参加したことは今後の実践を考える上で参考になった。なお、Dwight Boyd 助教授には中国への研究旅行の帰途、日本道徳性心理学研究会（10月7日に名古屋で開催）に特別ゲストとして参加していただくこととなった。

以上の様に、今回の在外研究は4カ月の間に5カ所の大学をまわるという大変に忙しいスケジュールであったが、今後の道徳教育実践研究について多大の成果を収めることができたと感じている。

**【訪問先と期間】**

**アメリカ**

- フロリダ州タンパ 南フロリダ大学  
スピルバーガー博士（不安・ストレス）  
2/2～3/13（19日）（門脇岳彦氏とご家族来訪）、山田恒夫、清水
- インディアナ州サウスバンド ノートルダム大学  
パワー博士（認知発達道徳教育）  
4/4～4/19（15日） Niclas Aye (Monen Seminary) 日常に世話、藤本夫妻
  - ・ South Bend コミュニティスクール・Yes プログラム パワー教授
  - ・モンテッソリー小学校 (Montessori Academy), 丸田祥一
- イリノイ州ミネアオボリス ミネソタ大学  
レスト博士（認知発達道徳教育）  
4/20～5/8（18日） Darcia Narvaez レスト夫人
  - ・ Washburn 高校（第2外国語として日本語を選択） 森昌子
  - ・ Hans Christiann 小学校（少数族重視学校）
  - ・日本人学校（日本語補習学校）
- カリフォルニア州ロサンゼルス  
5/9～5/29（20日） 森川氏来訪（ゲストハウス）  
UCLA（カリフォルニア大学ロサンゼルス校）ゲストハウスに宿泊（ホーキンス比較教育学部長）
  - ・教育評価研究所—エヴァペーカー（教育評価） 畑野裕子さん
  - ・ステイグラー准教授（数学教育） 吉田誠助手
- SCL（南カリフォルニア大学）O'NEAL 教授（不安、動機づけ）  
畑野裕子さん
  - ・UCLA 附属小学校（デュエイ実験学校）Amie Watson 副校長 田中義朗氏
  - ・あさひ学園（日本人学校）吉岡淳校長、パイリンガル国際学院、松浦三郎氏
  - ・カサモンテッソリー学校（全日制）Sakura Lang 校長 山田礼子さん（現同志社大学教授）

**カナダ**

- トロント州 トロント大学 オンタリオ教育大学  
ポイド博士（教育哲学）  
3/14～4/3（20日） 山根耕平氏と行動を共にする。
- ゲイトウェイ小学校  
・国語教室（日本時学校）鈴木美知子校長
- オタワ大学（ベレンジャー教授）モラルジレンマ授業を見学

## 1994年度版(第6号) 巻頭言

1995年3月3日 雛祭の日に 教育方法講座 荒木紀幸

阪神大震災により被災された皆さまに心からお見舞い申し上げます。

私共の住まいする社町は阪神地区に近いのですが、幸い地震による大きな被害を受けず、関係者一同普段通りの生活を続けています。地震直後の研究室の様子(写真)を最後に載せました。皆さま方にはこれまで何かとご心配頂きました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

1月17日午前5時46分の地震発生から40日以上も経過しているのに、まだ9万近くの方が学校や体育館などで不自由な避難生活を送られている。被災地は今なお異常な事態にある。私の20歳になる長女は西宮市夙川、若松町の下宿先で被災した。昔ながらの家屋敷は殆どが全壊状態で、同じ敷地内の大家さんの奥さんは家の下敷となって亡くなられた。娘のショックは大きく、暫くはひとりになるのを極端に恐れ、何をするのも家族をそばに呼び寄せていた。震災後10日ほど経って娘と訪れた夙川の町は転居先の張り紙を残した全半壊の家が多く、人影も少なく、ひっそりとしていた。自動車教習所に免許取得のため夜間通っていた娘は、夙川駅を降りると一人暮らしのおばあさんが住んでいる家の灯りを頼りに、暗い人影のない高架橋の下を通りすぎていたという。おばあさんの家は全壊し、花束が供えられているのを見つけるや娘は、手を合せ、暫くそこを動かなかった。昨夜は言葉を交わした大家さんの奥さん、赤々と明かりを灯し平和に暮らしていたおばあさんは、帰らぬ人となり、見慣れた町は跡形も無く変ってしまったのを見た娘が、「私の人生観も変わった」とつぶやくのを聞いた。

このような中で、続々と届けられる救援物資や救援活動の様子、若い人を中心としたボランティアの活動、あるいは内外から送られてくる義援金、被災者同士の助け合いの姿など、毎日「人間の善意も捨てたものでない」と感心させられ、ほっとする思いにかられる「記事」や「報道」に出会う。テレビから流れる「水でてるよ。持ってて。そやけど、ナマで飲まんといてな。ポンポンこわすよってに。」、「人を救うのは人しかいない。」というコマーシャルが自然に目に止まる。人の善意が素直に「有り難い」と受け取れる。被災に遭われた人が一刻も一日も早く、1月16日以前の普通の生活に戻れる日が来ることを願わざるを得ない。

しかし、一方で、このような混乱の中で、被災された方々の生命や財産、人権はもとより生活、住居、医療や福祉等について、あるいは不幸にして亡くなられた方への処遇について、公正や思いやりといった側面から、これまで自治体や公が下された決断や判断が、あるいは決断された時期が、どれくらい当事者にとって、正当であったといえるか、正しかったのかについて、疑問に思ったことや歯がゆいと思ったり、腹立たしかったりしたこと

も数多くあった。

地震直後、電話が不通になり、道路が寸断され、被災を受けたと思われる娘の安否が分からず、午前中テレビの前に釘づけになった。テレビでは、被災地の様子が写し出されるのであるが、その殆どのチャンネルでは物見遊山的な報道であった。映像は画一的で、高速道路の橋げたが何十メートルにもわたって折れ曲がり、道路が大きく崩れた映像、大型バスが崩壊し寸断された高速道路の上で辛うじて下に落ちないで止まっている映像、地震で崩壊した阪急伊丹駅の映像、傾いた三宮駅前のビル、全壊した民家など、被害のものすごさをアピールするセンセーショナルな映像が何度も何度も、繰り返し流れていた。多くの被災した人を直接、間接に知っているわれわれ近隣の者にとって、このような報道は許せるものではない。われわれは被災者の情報が欲しいのである。幸い娘から地震の後3時間経った9時過ぎに無事である旨の簡単な電話連絡が入り、先ず一安心した。しかし被災の状況について詳しくは何も分らなかったのも、この後もテレビの報道に頼らざるを得なかった。欲しい情報を何も流さないテレビには正直いらいらした。日本各地で、被害の様子をテレビで見ている人にとって、この映像は十分、ショッキングであろう。しかし神戸の何区の何町のなん番地の当りの被害はどうか、おばあちゃんに怪我はなかったか。火やガスは大丈夫か。あの店はつぶれたのか、店の人はどうされているのか。被災に関係する人にとっては、阪神地区、淡路島のすみずみに渡って些細であるが沢山の情報が欲しいのである。被災者の目になって、あるいは被災者の身内になった目での映像や報道が必要なのである。すべての避難所をじっくり写し出すことで身内や知人を見つけ安堵の念を抱くのである。

しかし映像はいつも県や市の中心的な避難所1、2ヶ所を取りあげ、これが避難の状況だと言ったレポートが繰り返される。それがいかに画一的な報道であるか、中央で放送をコントロールしている関係者には分かっているようである。キメ細かい報道が必要なのである。その中であって地元のサンテレビだけがいち早く独自の被災映像、神戸市内全域にわたって被害や避難先の様子が具体的に分る事細かな映像を流していたのが印象的だった。

被災者の救済という面で今ほど公正な判断や配慮が望まれることはない。それは被災者の生活のあらゆる面におよんでいる。仮設住宅への入居はどのような基準や判断でなされるのか、を一つ取り上げても様々な問題が持ち上がる。義援金の分配の時期の判断、分配の基準の決定、救援物資の受入れと分配に係わる基準や判断など、救済を受ける側からの公平上の問題がある。救援や援助する側からの問題として、「善意の押しつけ」や「誤ったボランティア意識」からくるトラブルがあろう。人としての、在り方、生き方という点で「救援」に関して道徳的なジレンマも数限りなく起っているものと思われる。そのようなジレンマに係わる判断を委ねられている人が、

どのような判断を下したかで、多くの被災者にとって公正が守られない場合も起こってこよう。これが社会問題にまで発展する可能性がある。以上のような事柄について、どのような判断や決定が行なわれ、実行されたかを、人間としての生き方や在り方の問題として見守りたい。

ただこの様な緊急の混乱した事態に遭遇した時、理性的に問題を把握し、すべての被災した人の「生」にとって、どのような判断を下すことが正義なのかを考えることが人間としてきわめて必要とされることでないか。われわれが推し進めているコールバーグ理論に基づく道徳教育は、このようなどちらが正しいか岐路に立たされた時の判断のより所について、自律した人間として、その考え方をより優れた考えの元に発達させることをめざしている。

ご存知のように、これまで日本の各地で多くの先生方によって行なわれてきたモラルジレンマ授業実践は、確実に、また着実にその成果を上げている。多くの先生方が、コールバーグの道徳教育論は十分傾聴に値するものであると言う認識を持って下さるようになった。我が国において、コールバーグが提唱した道徳性の発達に関わる教育は未来に向かって益々重要な意義をもつものも言える。実践の輪がこれまで以上に日本のすみずみに広がっていくことを願って止まない。

皆さん、実践の輪と一緒に広がっていきましょう。

夏の研究会は大阪で開きます。是非お会いしましょう。



95年1月17日  
荒木研究室、地震の傷跡  
この程度で済みました



### 1995年度版（第7号） 巻頭言

1996年3月3日 教育方法講座 荒木紀幸

ある民間の教育団体が昨年（1995年）の日本を象徴する1文字の漢字を募ったところ、非常に多くの人々が「震」という漢字を連想している。「震」には、「ふるえておののく。びりびりとふるえるように激しいさま。」という意味がある。「震」からはきわめて劣悪で、怖くて、嫌な、暗いイメージしか出てこない。その象徴的な事件が阪神大震災であり、オウムによるサリン事件である。

我々が籍を置く教育界に転じてみても、昨年はいじめの多発と子どもの自殺の続出、教師による体罰問題等、忌まわしい目にあまる事件が後を断たなかった。いじめや体罰の問題は今に始まった問題ではないが、今日ほど目に余ることはない。サリン事件の加害者や今問題になっているHIV薬害訴訟における厚生労働省や製薬会社、告訴されている医学者らが抱える問題についても教育と無縁ではない。

このような問題が起ると、きまって道徳教育、人間教育の充実が声高に叫ばれる。しかしながら、いじめの体質や体罰を肯定する考えは、生まれて以降長年の間に培われて出来たものである（その根底に人間の尊厳をあくまで大事にしようとする人間尊重の精神に対する無関心があると思われる）。いくら小手先を変えても、教師も変わらないし、子どもも変わるものではない。根本にある教師の人間観や教育観が変わってこない。「人格教育」や「人間教育」はできない。子ども達も本当の意味で人間を愛する人間に成長しない。モラルジレンマ授業においてもこの事はしかりであろう。

授業の小手先を真似ても、先生のもの見方が変わっていないと授業は本質的に変わってこないし、子どもの道徳的な成長を期待できない。モラルジレンマ授業に対する関心が高まり、実践が広がったが、モラルジレンマ授業の一人歩きも始まったとも言える。御都合主義の解釈が先に立って、歪んだ授業が展開され、評価される。手放しで喜べないと思っている。我々は絶えずコールバーグ理論の基本に立ち返り、初心を思い起し、研究に精進すべきだと考えている。

今回の年報では、研究会のあゆみに留らず、教育方法講座、あるいは道徳性発達研究会を巣立った仲間やモラルジレンマ授業に関心をもって実践されている現場からの事例報告を積極的に取り上げると共に、「いじめ」問題への具体的な取り組み等についても紹介する。

### 1996年度版（第8号） 巻頭言

1997年2月16日 教育方法講座 荒木紀幸

『**の知能指数**』が今年7月に講談社から出版された。まだ半年も経たないのに、もう100万部に迫る売上げと聞く。この書に向ける世間の関心は極めて高い。それは同書が「人間はIQが全てでない」、「IQ人間は信用ならない」、「IQで計れない優れた人間がいる」と強く訴えているからである。この1年の間、義憤を感じる事件によって日本は埋め尽くされているのではないか？例えば、オウム事件、薬剤エイズ事件、福祉を食い物にした厚生労働省官僚の贈収賄事件や国会議員のオレンジ共済事件など、あげれば切りがない位に多い。そしてこれらの事件に共通していることは、事件の当事者がいずれも最高学府、エリート大学を卒業しているという事実である。まさに、売れ筋の背景に、IQ人間不信、IQ人間を養成してた学校教育への不信があるように思える。

我々が使っているIQは、新しいことがらを学習していく力がどの程度潜在的に備わっているかを予想したり、学校でどの程度の成績をあげることができるかを推測したり、学力試験の結果（成績）を予測する道具となるものである。常識的にはIQは読み、書き、算をこなせる頭の良さと関係が深い。このIQの高さが成功への鍵、幸せの切符というように世間では考えてきた。しかし、この考えは必ずしも正しくはない。そのことを声高に訴えているのがダニエル・ゴーマン氏である。彼は、知能テストで測られたIQとは質の異なる頭の良さを現わすために、「こころの知能指数」、EQ (Emotional Quotient) ということばを用いた。ダニエル氏によると、試験で成績を取る頭の良さとしての認知能力は知性の働きのごく一部にしか過ぎないという。知性の中には、自分自身の感情や他人との関係をうまく処理する働きがあって、この働きこそ現代人に欠いているもので、今こそ注目しなければならぬ。このような知性の働きを総称してこころの知能指数、EQと名付けたのである。EQには、

「自分の本当の気持ちを自覚し尊重して、こころから納得できる決断を下す能力」

「衝動を自制し、不安や怒りのようなストレスのもとになる感情を制御する能力」

「目標の追及に挫折したときでも、楽観的であり、自分自身を励ます能力」

「他人の気持ちを感じる共感能力」

「集団の中で調和を保ち、協力しあう社会的能力」

などが含まれる。

ダニエル・ゴーマン氏はこのEQ教育に関連して、日本の教育に対して重大できわめて示唆的な発言を行っている。アメリカでは、学校の成績がその人が社会に出てから成功するかどうかの予言にならないし、まして幸せな人生を送れるか、世の中の役に立つ人間になれるかどうかを決定する要素ではない、と考えられるようになってきた。それと共にこころの教育の必要性が一層切実なものとなった。日本の社会も似たような方向に向かっていく。知識偏重教育を回避する教育、学校社会をめぐっ

て生じる不安やストレスに青少年がどう対処するかの教育、いじめをなくすために親切や思いやりを重視する教育、への転換などが必要である、といった提言である。

日本でも、この「こころの教育」の必要性は早くから叫ばれてきた。学習指導要領が改訂になる度に、「こころの教育」は常に重点項目であった。しかし、具体的な成果のないまま現在に至っているといっても過言ではない。

1994年の雑誌「デニム」7月号に、**これからは [IQ] ではなく、[EQ] の時代！?**という見出しの下に特集が組まれたことがある。そこには「こころの教育」をめざす『道徳教育』について二つの評定基準と考え方や人間像、道徳授業の紹介があった(128頁～133頁)。

その一つはイギリスのノーベル物理学賞受賞者、ガポール氏が著した“成熟社会”の中で提唱した Ethical Quotient (倫理指数) とその基準 (倫理的な性格を測る尺度) である。理想的な人間は、高いIQと高いEQに高い動機指数 (Motivation Index) が加わった人物をいう。EQ尺度それ自体は現時点で開発されておらず、経験を積んだ教育者が社会での人の行動を観察して、どの程度倫理的な態度をとれるかを測定している。これは子ども向けではなく、大人にのみ適用できる尺度と限定されている。お茶の水女子大学の森隆夫教授は、EQ人間について次のように述べている。「汚職や3億円強盗のように計画的な犯行、IQが高くてもEQ指数の低い人のやること。わたしたちは、両方を高めるように努力しなければならないんです。そしてどんなにIQとEQが高くても“意気込み”がないと、社会的に不適格と言うことになります。

いま一つの心の評定はコールバーグ博士による道徳性発達段階理論である。雑誌「デニム」7月号で、我々が1983年から取り組んできたモラルジレンマ授業と松尾廣文氏と荒木の開発になる中学生版役割取得検査 (アルメニア大地震、「奇跡の生還」) が大きく取り上げられた (1994, 128-133)。ご承知の如く、コールバーグ理論ではモラルジレンマ物語に対して、人がどのような理由づけのもとに判断したかを分析し、彼らの道徳的なものの見方を3水準6段階で評定していく。モラルジレンマはオープンエンドであるためにいろいろな考えが可能となる。この授業ではモラルジレンマを集団討議する中で問題解決するのであるが、人間の権利や自由がどこまで尊重され、認められるか、正しさとはいったい何か、正義とはどういうことかについて、子どもと先生が一緒になって考える展開となっている。理論に基づいて導き出された人間像は人間尊重を基底とした自他の尊厳を大切にす自尊感情 (Self-Esteem) を備えた人間である。そのような人物は道徳性を今の発達段階よりもより高い発達段階へ高めることで次第に達せられる。

このようにコールバーグ博士の唱える道徳性はダニエル・ゴーマン氏の『心の知能指数、EQ』と非常に密接

に関係している。コールバーグ理論ではこの道徳性を発達させる能力（Ethical Quotient に対応）として、IQ に対応する認知能力と EQ（Emotional Quotient）に対応する役割取得能力の2つを想定している。コールバーグ理論にとって IQ と EQ の統合が個人の中で求められているとすることができる。つまり、IQ（認知能力）だけでは道徳性の発達は見込めなく、道徳的な人間に成長できないということである。なおわたしたちはこのような道徳性を**社会的知能**、**福祉的知能**と行うことができると考えている。EQ における関心を一時のブームに終わらせないために、お互いに「心の教育」、モラルジレンマ授業の取り組みに一層精進したいものである。この年報が『心の教育』を支え、その発展に貢献できることを強く願っている。

なお、最近筆者は、「こころの教育」に関連して、「モラルジレンマ授業の教材開発」を明治図書から出版した。また子どもたちの充実した学校生活のために「学校内で生じた不安（テスト不安・学習不安・対人不安）を低減し、「自尊感情」を育てる「測定尺度」、「ウエルライフ・中学生学校生活充実検査」をトーヨーフィジカル社から出版した。参考にしていただければ幸いである。

### 1997年度版（第9号） 巻頭言

1998年2月22日 教育方法講座 荒木紀幸

わが国は物質的な繁栄を遂げたが、反面ゆとりを失い、自己実現や心の豊かさの面で問題を抱えている。それは、社会の中に同質志向や横並び意識、過度に年齢にとらわれた価値観などが根強く残っているからである。今後は、個性が尊重され、自立した個人が自己責任の下に多様な選択を行うことができる。真に豊かな成熟した社会の創造を目指すべきだとする答申を、昨年7月に中央教育審議会が『21世紀を展望した我が国の教育の在り方について』の審議の（まとめ2）で行っている。この中で、教育は、『自分探しの旅』を助ける営みと位置づけ、一人一人の個性をかけがえのないものとして尊重し、その伸長を図ることを教育改革の基本的な考えとしていくべきだと述べる。

個性化教育の重視は先の学習指導要領の改定（平成4年）で打ち出されたものである。我々は既に15年ほど前から、『道徳の時間』が子どもの「主体性が生かされた、楽しい、実のある時間」にしたいという問題意識に立って、コールバーグの道徳性発達段階理論に基づいたモラルジレンマ授業を実践してきた。ここでは直面する認知的な矛盾やズレとしての道徳的な問題、特にモラルジレンマ（価値葛藤）をどのように解決したか、つまりどのような理由から価値選択したかを通して道徳性の発達を目指してきた。道徳性の発達が志向するのは、『公正に関する普遍的原理』志向、「人間尊重への原理」志向で

ある。道徳性の発達途上にある子どもたちにとって、彼らの道徳的推論や道徳的論証はオープンで、多様で、未来に開いており（オープンエンド）、広く個人差が認められる。そこには社会化のための他者への同調と自尊感情を大切にした個人の生き方、在り方での確立が基底にある。我々はこのようなモラルジレンマ授業のもつ方法論が個性化教育の1つの在り方を示していると繰り返し述べてきたし、教室の中で子どもたちはそれぞれの道徳性を発達させていることを明らかにしてきた。

「個性の尊重」の1つの帰結は、豊かな創造性の育成にあるだろう。創造性を阻止する要因として常に言われることの1つが日本の和を重んじる社会的な圧力である。人と違うことや新しいことをはじめるとすぐ横やりが入る。ことわざにも「出る杭は打たれる」、あるいは、「きじも鳴かずば撃たれまい」とある。時に、「赤信号、みんなで渡れば恐くない」といった同質思考や横並び意識が間違った形で尊重される。このような日本を取りまく社会の中でどのようにして創造性を高めることができるか、そのために教師にはどのような指導が求められるか、このような問題意識に立った研究室の宮瀬弘吉院生は、『中学生の創造性と不安の関係に関する一考察』という修士論文（1998）を提出した。この中で創造性は拡散的思考と論理的思考は集約的思考と関係しているとし、他人の目や他人からの評価が気になる不安を対人不安と呼び、これが拡散的思考を抑制、妨害するために、創造性が育たないと考えた。このように日本の社会風土の特徴から考えて、対人不安を除き、対人不安を低減することによって、生徒たちが潜在的に持っている創造性が引き出せるという仮説を検討している。この研究を通して宮瀬氏は、教師が積極的に生徒の不安を低減しながら創造性教育を図るのでなく、生徒自身が自分の力で不安をコントロールできるように教育すると共に、生徒の自尊感情を高めながら、創造性を阻止している他者への同調圧力を抑制し、他者への依存心、疎外感を打ち破る力を培う教育が必要であると結論している。

ここで示唆的なことは不安を低減するのでなく、不安と拮抗する自尊感情を育てることが個性化教育には必要だということである。ひるがえって、道徳教育に眼を向けるとき、よく考えた末に道徳的に良い、正しいと判断したことを、他人の言動に流されることなく、自己の自由と責任においてきちんと自己の生き方、在り方として主張できることが大切である。最近の我々の研究の中で明らかになってきたことは、集団討論の中で自尊感情を育てながら、子どもの道徳性を高めていくことが重要であるということである。我々はモラルジレンマを集団討議によって解決させる過程を通してそれぞれの道徳性を発達させようとしている。この機会を利用し、モラルディスカッションを行わせることである。さらに思いやり重視、公平・公正な扱いという民主的な学級経営に心がけることで、潜在的カリキュラムへの配慮を行うことであ

る。正しい行為、良い行為は単に人の意見に合せ、人の行為に同調するのではなく、自己の責任で自律的に行動できるという意味で、その根底には自尊感情がある。

多様な価値観が存在し、いろいろな生き方が肯定され、何がいったい大切にされなければならないかについて、不透明な時代である。アムロ・ファッションが流行ると、化粧の仕方から服や靴まで、みんなアムラーになってしまう。アムロ自身は一世を風びし、確かに個性的と言えるのであるが、右ならえした女子学生については一見個性的のようで、個性は微塵も感じられない。ルーズソックスや軍手をはめることが一部の女子校の間で流行ると、それはすごい勢いで全国に広がってしまう。孤立を嫌う横並びの思考はどっこい若者の中にも根強く残っている。人は社会の一員として他者と同調し、積極的に社会に関わる一方で、その人特有の生き方、在り方を追求し、自己実現することが期待されている。流行に乗ることを否定しないが、流行の犠牲になるようであってはならない。

このような時代をしっかりと見つけ、在り方や生き方を見極める力をつけることが大切である。繰り返しになるが、モラルジレンマ授業の特徴の1つには、十分時間をかけて、しっかり、『なぜよいか、なぜ悪いか』、『なぜ正しいか、なぜ間違っているか』、『なぜ道徳的に見ておかしいか、変なのか』を見極め、考えさせることがある。多数意見が常に正しいとは限らないのである。衝動的に振る舞ったり、みんながしているからと同調したり、一時の感情で道を誤ることがあってはならないかを反省させる。どう振る舞うかが自分にとっても、まわりにとっても正しく、公正なんか、をしっかりと考え、自分に誇りをもって判断することが大切である。また自分の言動には責任を伴うことを自覚させる。このように個性的で、独自の生き方、在り方をする自律的な人間の育成に当たって、モラルジレンマ授業に対する期待は今後ますます高まるものと思われる。皆さんの協力を得て、これからも実践の輪が広がり、日本の各地でモラルジレンマ授業が行われることを願っています。

### 1998年度版（第10号） 巻頭言

1998年2月27日 教育方法講座 荒木紀幸

2月22日付けの読売新聞に、父あて「修学旅行に参加しません」障害生徒に手紙書かす、という記事が出ていた。内容はこうだ。脳性小児麻痺のため両足が不自由で、車椅子で通っている中学二年生の女子生徒が修学旅行の参加の意志を校長、担任、特殊学級の主任教諭の前で尋ねられた際、「二泊三日の旅行は無理なのは」「飛行機のタラップの上がり下がりの介護が大変。引率は難しい」等といった教諭たちのやりとりを聞かされ、不本意ながら、「長時間の旅行は体が疲れる。修学旅行はみんなと別に行く。」といった文面の手紙を父親宛に書いたという。

父親の抗議で校長が謝罪して問題が收拾されたとあった。乙武洋匡（おとたけひろただ）さんの「五体不満足、講談社」を読み、教育的配慮とはこうでなければと思ってた矢先だったので、とても残念な暗い気持ちになった。

乙武さんは早稲田大学の政経学部の学生さんである。先天性四肢切断という障害を単なる「身体的特徴」と考えて、「自分にしかできないこと」「心のバリアフリー」を訴え、昨年十月に「五体不満足」を著した。その中で彼と彼を取り巻く人々との関わりを通して自分の生き方がどのように確立していったかが書き綴られている。彼を取り巻く人間関係の中にいくつもの教育的配慮を見ることができる。先の中学校では修学旅行に同行する人への配慮のあり方が問題とされている。乙武さんも「車椅子では弘法山登りは無理だろう」と遠足欠席の意思を担当の高木先生に伝えている。しかし先生も子ども達もその欠席を認めなかった。子ども達はいつせいに「そんなに登るのが大変な山なのに、オトちゃんだけ休むなんてズルイよ」と乙武さんを非難したのである。クラスの仲間であるオトちゃんだけが遠足を休むのは公平でないと子ども達は考えたのである。これは一つに高木先生の乙武さんだけを特別扱いしないという方針のもとに、「自分でできることは自分でする。どうしても一人でできないときには、みんなで手伝う。」という思いやりと公正感に裏付けられた学級風土ができていたお陰であろう。

教育的な配慮はたいがい厳しい選択につながる。誰もが等分に苦勞を背負い込まなければ公正や正義が保たれない場合がほとんどであるからである。問題を克服するためにとられる教育的な配慮を実行していく中で、互いを信頼する気持ちや相互扶助の心が育って行く。そこに集う子どもそれぞれの自尊感情が高められる。このクラスの子どもたちや乙武さんは当然であるが、先生を含め学年全体が大変な苦勞の後、弘法山の山頂に立ったのである。そのときの感動を彼は、次の文章で表している。

「今まで食べた中で、一番おいしかったものは？」と聞かれれば、ボクは間違いなく「弘法山の頂上で食べたおにぎり」と答えるだろう。

さて、我々はコールバーグの認知発達理論に依拠してモデル化されたモラルジレンマ授業を通して子ども達の道徳性、「公正に対する普遍的原理」「役割取得の原理」「人間尊重の原理」を高めるべく実践している。これまでの内外で報告された多くの実践から、次のような学力の形成にモラルジレンマ授業は貢献できるという主張を行ってきた。

1. 道徳性を発達させる。
2. 学習スキルを改善する。
3. 自尊感情を高める。
4. 学校生活を生き生きと充実したものとする。

乙武さんの「五体不満足」を読まれた方は、彼が人生の岐路に立たされ、葛藤し、悩んだ問題を、彼を取り巻く人との関わりの中でどのように解決してきたかを理解

されたことと思う。そのような解決の方法は、我々がこれまでモラルジレンマの解決を通して主張してきたこと、あるいは実践してきたことの多くと重なっていることに気づかれたことと思う。是非ご一読して頂きたい。この本には生きる喜びや生きる力を奮い立たせる魅力がある。

学習指導要領が昨年暮れに改訂となったが、心の教育の充実のために一層道徳教育は充実されなければならないとある。それは大変喜ばしいことである。しかしながら、これまでの多くの先生方の道徳教育へのこだわりや取り組みから察し、また新しく導入された改訂の目玉「総合的な学習」への強い注目と学習時間が大幅に削減された教科学習への配慮から、道徳教育がこれまでと同じように、置き去りにされるのではないかという一抹の不安がある。時勢に流されないように、二十一世紀を担う子ども達にほんとうの「生きる」力をつけるために、道徳教育に目を向け、モラルジレンマ授業を広く普及し、率先し取り組んで頂きたいと願っている。

#### 1999年度版（第11号） 巻頭言

2000年2月29日

超レアな400年に1度のうるう年の日に 荒木紀幸

昨年、一昨年とコールバーグ理論のよき理解者であり、道徳性心理学研究と道徳教育を推進されてきたお二人の心理学者が相次いで亡くなりました。お一人は道徳教育フォーラム編集長のリサ・クーマーカー博士 (Lisa Kuhmerker) であり、もうお一人はコールバーグ博士の高弟、外在研究員として師事したミネソタ大学倫理発達研究所所長のジェイムズ・レスト博士 (James, Rest) です。

クーマーカー博士は北米道徳教育学会 (AME) の前身、北米道徳教育協会初代会長をつとめられた方です。ちなみに AME はコールバーグ博士が1976年に設立されています。AME は女史の功績をたたえ、1982年に「クーマーカー賞」基金を作り、総会時に道徳教育に特に貢献のあった人を選出し「クーマーカー賞」を贈り祝っています。なお編集長として20年にわたって発行されてきた「道徳教育フォーラム」は、女史の死をもって廃刊となりました。博士が道徳教育の中で特に関心の高かった領域は小学校の道徳教育に関してです。1987年第1回道徳教育国際会議がモラロジー研究所で行われたときは、博士の演題は「小学校段階における道徳教育」でした。この中で小学校段階における道徳カリキュラムの編成について具体的な提案をされていました。私も「道徳教育はこうすればおもしろい—コールバーグ理論とその実践、1988、北大路書房」の中で、低学年でのモラルジレンマディスカッションのあり方を論じたとき、博士の言を引用させていただきました。博士が脳腫瘍で病床にあると知ったのは1997年12月22日付で投函されたレスト博士ご夫妻か

らのお便りを通じてでした。手紙には、脳腫瘍の悪化 (グレード4) で、先生は2年以上生きる確率が2.5%の手術をこれから受けられるが、励ましの手紙を出してくださいとの内容でした。既にかきましたようにクーマーカー博士は帰らぬ人となりましたが、今一度先生の業績を振り返って、日本における道徳教育の在り方を考える参考としたいと考えています。

ところで、レスト博士は米大学の中ではじめて倫理に関する発達研究所を設立された先駆者です。博士とはモラロジー研究所で行われた第1回道徳教育国際会議 (1987) の時、初めてお会いしました。とても明るくて物腰の優しい南部出身の方です。博士はコールバーグ理論の具体的な発展として、道徳的認知、感情、行動を統一的にとらえるために4つの心理学的過程としての要素説を提案され、日本では、「道徳実践における四つの構成要素」と題した講演をされました。私はこのレスト博士のお考えを「ジレンマ資料による道徳授業改革—コールバーグ理論からの提案—1990、明治図書」に紹介させていただきました。これまで私の研究室でレスト博士の考えを取り入れて道徳教育実践論文を書いたのは新垣千鶴子氏と原壽氏の二人です。第2回道徳教育国際会議がノートルダム大学 (1990、第15回 AME 共同) で開かれ、ゲストスピーカーとして招かれた会場の司会者として私の発表の進行役をしてくださったのがレスト博士でした。

これをご縁に外在研究で渡米した1993年4月から5月にかけての20日ほど客員教授として迎えて頂きました。その折り先生は既に右足麻痺で杖を欠かせませんでした。夜間の授業が終わると宿舎まで車で送って頂いたり、休みには美術館や自然科学館を案内して下さったりお世話頂きました。先生がお忙しいときには代わってドロージャ (Darcia Narvaez、現在 AME 理事で事務局担当) さんが運転され、また構想中の博士論文についても質問を受けたりしました。私が訪問した頃はちょうど結婚されて間がないと伺いましたが、確かにアツアツだったように思います。次頁に載せたお二人のスナップ写真からもお分かりかと思えます。レスト先生の訃報に接し、ドロージャさんの深い悲しみを考えると胸がいっぱいになります。私はドロージャさんと1990年ノートルダム大学道徳教育学会でお会いしています。当時院生でとても美しく、ひときわ目立った存在でしたのでよく憶えています。ミネソタ国際空港へ降りたとき、思いもかけずお二人の出迎えを受け、大変びっくりしたことを思い出します。お土産に頂いた雁を配したミネソタ織りのテーブルクロスは今でも我が家の和室テーブルを飾っています。

博士は障害者手帳を持って大学構内や町をあちこち案内してくださったので、障害者への福祉現況が手に取るようにわかり、日本の福祉行政がいかにも遅れているか、米国市民の福祉への対応が日本人と大きく違ってゴクゴク自然で、心理学以外でも博士を通して大変勉強になったことが思い出されます。足の麻痺が進行していると伺っ



レスト博士ご自宅で  
(1993. 4. 24)



レスト博士とドロシアさん  
(1993. 5. 8)

てはいたのですが、昨年7月に突然の訃報を聞き、ほんとに驚きました。レスト博士にはもっと長生きして認知発達段階論に基づく道徳教育を推進していただければと思っていました。コールバーグ博士は道徳性発達検査として「規範—基本判断判定法検査」を開発されたのですが、レスト博士はモラルジレンマを多肢選択による解決を迫る客観検査、葛藤価値定義づけ検査 (DIT, Difying Issue Test) を標準化されています (最近新訂版が出されました)。これは成人用であり、日本では山岸明子教授が青年成人用として日本版 DIT を作られています。研究室では帰国後上田仁紀氏と一緒にレスト博士の作られた検査を参考に小学生版を標準化し、正進社より「モラルジレンマを用いたフェアネスマインド・公正観 (Fairness Mind - Morality information by dilemma) 検査」として市販しています。現在中学生版を棚澤実氏や研究生の皆さんと開発中です。また、ミネソタ大学に滞在中、「モラルジレンマ授業で子どもたちの道徳性が確かに高められるのだけれども、だからといって四六時中モラルジレンマ授業ばかりを行う訳にはいかないし、どうすればよいものか？」と尋ねたことがありました。同じ悩みを自分も持っているとおっしゃられ、道徳教育実践に関心のある私のために、参考にしたらと、リコーナ博士 (Thomas Licona) の書かれた「キャラクター・エデュケーション、どうすれば学校で尊敬と責任を教えることができるか？」(三浦正さん翻訳、こころの教育論、として慶應義塾大学出版会から出版されています) を私に下さいました。

私もリコーナ博士と同じようにモラルジレンマのみに固執するのではなく広い視点から道徳教育を考える必要があると考えています。ただ「あれもよい、これもよい、何でもよい」といった道徳教育は結局教育上の矛盾を引き出すことになると考えます。木に竹を接ぐようなことがあってはならないと思うのです。ピアジェは教育の第一の目標は創造的な人間の育成であり、第二は批判的に物事をみる力の育成であると述べられました。コール

バーグ博士は人間の尊厳を基底に、分化と統合の増大が規範性と普遍性をもたらすとする認知発達段階論を展開されました。リサ・クーマーカー博士、ジェームズ・レスト博士、お二人の研究遺産も取り入れながら、我々はさらに広く、深く道徳性の認知発達段階論を展開できればと考えています。リサ・クーマーカー博士、ジェームズ・レスト博士、お二人のご冥福を心よりお祈りします。

## 2000年度版(第12号) 巻頭言

2001年2月23日 教育方法講座 荒木紀幸

内外教育2月9日付けに、「授業を創る」に寄せられた向井氏の「道徳の時間は進化する」の中で、モラルジレンマ授業について、次のような気になる記述がみられた。『一方で、認知発達心理学の立場から道徳性をとらえようとする動きもあるが、現場では、その理論から「モラルジレンマ資料」なるものだけが導入され、寄る辺なく独り歩きを始めている。』

そのようなことがないように、常に私たちは、声高に、「認知発達段階説に基づく道徳教育を行うことの意味、授業ではなぜ道徳性の発達をねらいとしているか、なぜモラルジレンマが道徳性の発達にとって必要か」などについて語り、具体的に、いろいろな機会に、授業の進め方を提案し、実践してきた。これまで明治図書、北大路書房はじめ多くの出版社の協力を得て、モラルジレンマ授業に関わる実践集や資料集、その理論的背景について十数編に及ぶ出版を行った。また授業の進め方を読者が目で確かめることができるようにと、明治図書は授業VTR(小中学校、学年別)を販売している。この他昨年にはモラルジレンマ授業を中心とした中学校版副読本を正進社から発売し、また吹田市教育委員会の発行する中学校道徳教育副読本、「いきいき一心を開こう未来を拓こう」には、1主題2時間のモラルジレンマ授業の授業例、3学年それぞれ1題が掲載されている。全国各地に広がる道徳性発達研究会の仲間の先生方がコールバーグ理論に基づくモラルジレンマ授業を実践し、公開することで、まわりの先生方にこの授業の良さを知って頂くだけでなく、授業実践のすそ野を広げるべく頑張っておられることはいうまでもありません。

私たちは、20年前、次のような問題意識に立ってコールバーグの道徳性認知発達段階説に基づいて授業実践、授業研究を行ってきた。

- 1) 現行の道徳教育の目的を損なうことなく、しかも「道徳の時間」が価値の押し付けにならざるを得ないという誤解を打ち破りたい、
- 2) 発達という視点を軸に一人ひとりのものの見方、考え方を大切に生かしたい、
- 3) そのために結論よりもそこに至る理由づけの中に、自身の体験をひっさげて討論に参加できるような場をど

のように作り出すか、つまりどうすれば「道徳の時間」を「子どもの主体が活かされた楽しい実のある時間」とすることができるか、

これは今でも変わらない。「子どもの主体が活かされた楽しい実のある時間」とすることが大切なのである。ただおもしろおかしく授業が進み、話が弾むことではなく、子どもたち一人ひとりにとって「実」のある授業、言い換えると、それぞれの子どものために価値ある授業でなければならない。だから、教師は授業にもっと責任を持たなくては行けない。自信を持って望まなければならない。「オープンエンド」を教師は何もやらないでよいと思いを違えてはいけない。オープンエンドは子どもたちの発達の可能性を内に秘めているのである。

役割取得もモラルジレンマ授業では非常に大切な概念である。それはこの発達が道徳性の発達と連動しているからだ。道徳性が発達するためには役割取得能力の発達を待たなければならない。役割取得能力が発達するということは、役割取得できる対象を広げ、その内容を深め、加えて他者の思考や感情を介した複雑な相互作用を可能にしてくれることをいう。形式的にはその通りである。

しかし、実際に役割取得できる対象が広がるためには、それにふさわしい経験（人間についてや自然について）を積まなければならない。だが人が直接経験できることがらはきわめて限られており、薄っぺらな場合が多い。その意味で、新しく設けられた「総合的な学習」では、積極的に、意図的に地域社会や自然の中で様々な体験活動を進めることが目玉となっている。役割取得という観点からも「総合的な学習」の成果が上がることを期待している。

それと共に、私たちは間接経験（自伝、小説、ドキュメント、裁判記録、新聞記事、雑誌記事）の中から、人間のもつ様々な心の痛みや苦しみ、悲しみや悩み、人生の機微、希望や絶望、愛や憎しみ、癒されることの意味を幅広く学びとることが大切である。若い世代の読書人口が減ったことはきわめて憂慮すべきことである。他者や人間の営みについて無知であることは、道徳性の発達という視点からも、また人間理解や人間賛歌の上からも大いに問題があるからだ。

最近、大平光代さんの著書「だから、あなたも生きぬいて、講談社」を読んだ。著者略歴には次のように書かれている。『1965年10月18日生まれ。中学2年のときに、いじめを苦にして、割腹自殺を図る。その後、非行に走り、16歳のとき「極道の妻」となり、背中に入れ墨を入れる。養父・大平浩三郎さんと出会って立ち直り、中卒の学歴を乗り越えて、「宅建」、「司法書士」と次々と合格し、29歳で、最難関の「司法試験」に一発で合格する。現在、非行少年の更生に努める弁護士として、東奔西走する毎日である。』

大平さんに役割取得することで、見えなかったこと、気がつかなかったこと、もっとよく見なければならぬ

ことなど多くを知ることができた。感謝したい。私たちはすべてを直接経験できない。役割取得能力を高めるためには、他者との直接交流だけでなく、直接経験できない価値あることがらを間接的に積極的に経験する必要がある。私たち教師は子ども達に人との出会いや体験と共に、読書や映画、演劇などの役割取得できる機会を数多く、広く提供できる環境を用意しなければならない。

## 2001年度版（第13号） 学会発足記念号 巻頭言

2002年2月24日 教育方法講座 荒木紀幸

21世紀という新しい時代が始まった。20年前の1982年に発足した道徳性発達研究会は、昨年7月8日に日本道徳性発達実践学会として大きく生まれ変わった。ここに、道徳性の発達と関係領域に関する研究年報、2001年度版、第13号を、学会発足第1号として発刊できることを望外の喜びと感じている。これを機会に一緒に研究実践できる仲間が増え、学会としての活動が活発になり、すそ野が広がり、道徳教育に限らず、広く「生き方」教育の全般に展開・発展できることを強く望んでいる。

研究をはじめた頃は、日本にモラルジレンマ授業の実践が皆無であった。この手探りの状態で資料作りから授業展開、道徳性の評価に至るまで、理論と実践の照合の中から、1つ1つ糸を紡いでまとまった授業という布に織り上げていく作業を何度も繰り返していた頃が今となっては懐かしく思い出される。昨今では、われわれ道徳性発達研究会が手がけ、作成したモラルジレンマ資料を用いたモラルジレンマ授業が、日本の各地の小学校、中学校をはじめ、高校や少年院、看護学校などさまざまな場で日常のように行われ、また保護者参観日や道徳教育の研究大会などで特別授業としてよく実践されている。

それはわれわれが明治図書出版や北大路書房から、モラルジレンマ資料として150編に及ぶ教材を提供してきたことが大きい。しかしそれと共に、教科書会社がモラルジレンマ資料を取り上げ紹介したことの意味もきわめて大きい。例えば、光村図書出版からは、「道徳4年 きみが いちばん ひかるとき一なくしたかぎ、矢野幸彦・荒木紀幸」、東京書籍からは、「小学 道徳6年生 どうすればいいの（けい子のまよい）、徳永悦郎・道徳性発達研究会」が採用されている。また、正進社からは、荒木紀幸の監修になる「中学生の道徳 道しるべ」が3学年に渡って発行されているが、その特色の1つはモラルジレンマ資料を用いた討論型授業にある。教科書会社とは別に、吹田市教育委員会では吹田市中学校道徳教育副読本「いきいき一心を開こう・未来を拓こう」を発行しているが、その中でモラルジレンマ資料、「僕には言えない、野口裕展作」「本当のやさしさとは、丸山屋敏作」「最終決定、野口裕展作」の他、具体的な授業指導案、価値分析表（兵庫教育大学道徳性発達研究会の作成）が

採択されている。

内外教育1月18日号の「道徳授業に生徒出演のビデオ制作」が目飛び込んできた。松尾廣文（東京都東蒲中学校教頭）作になる「文通」が「ラブ・レター」となってビデオ化されたのである。制作は那覇市立首里中学校、美術担当、大川剛先生である。早々に連絡を取って、ビデオを送っていただいた。本格的なモラルジレンマビデオ教材の誕生である。すでにそれは日本音楽著作権協会に登録されているという。この約7分の短編ビデオを用いた討論授業についても内外教育によると私たちが期待する方向で行われたことを示している。これまでわれわれもモラルジレンマ資料のビデオ化を何度か試みたがうまくいかなかったし、NHKの道徳教育番組でもモラルジレンマ資料のビデオ化が企画されたが、今回の学習指導要領改訂のために没になった経緯がある。だから大川先生には新しい挑戦をしていただき、研究会としても喜んでい。今後も制作を続けられるそうであるが、次を期待したい。

ところで、思いもかけない悲しい不条理なことが人生には起こることを思い知らされた。当時兵庫教育大学附属小学校4年生担任（息子寿友の担任）であり、その後院生として私のゼミに所属した徳永悦郎先生（現鳴門教育大学教授）、日本で最初に本格的にモラルジレンマ授業作りに取り組んだ研究仲間の一人が、この2月20日突然に徳島大学附属病院で亡くなられた。元気が肩を切って歩くほど健康で精力的なあの徳永先生が、である。研究の出発点に、優れた授業者であり、実践者である徳永先生が居なかったら、今日のようなモラルジレンマ授業の発展はなかったものと思う。それだけに49歳という短い人生を駆け抜けた徳永先生の死は悔やまれてならない。葬儀に参列し、20年近い研究での苦労や喜び、生前のご活躍の様子が走馬燈のようによぎっては消えた。誠に残念である。唯々ご冥福をお祈りし、衷心より哀悼の誠をおささげする次第である。安らかにお休み下さい。

#### 日本道徳性発達実践学会の発足に寄せて

神戸親和女子大学児童教育学科 教授 山根耕平

荒木先生のもとに道徳性発達研究会が発足して20年が経過しましたが、この間、毎年夏に開かれる研究大会には、全国からたくさんの先生方が参加され、研究会は確実に発展してきました。荒木先生を中心にした兵庫教育大学大学院生・卒業生の尽力のお陰と紙面を借りて感謝申し上げます。

さて、1990年代は「失われた10年」と言われていますが、本来は経済的な意味で言われたこの言葉が、社会全体についても当てはまるのではないかと思います。危惧しているのは、この「失われた10年」がさらに15年、20年と続くのではないかと、ということです。事態を深刻に

考えるのは、「心の退廃」ともいべき状況が社会に蔓延しつつあることが実感されることです。

教育の分野もこのような社会を反映してきびしい状況に直面しています。多くの問題・課題が山積しています。2002年から新教育課程が実施されますが、明るい展望が開かれてくるようには思われません。今、わたしたちは社会の急速な変化に対応して新しい発想とヴィジョンをもって事に臨む必要があるのではないかと思います。

道徳教育も、従来の発想を超えた、新しい思想が求められているように思います。そして、その思想とは、わたしたちが日々の実践を持ち寄り議論を戦わせることによって構築されるのだと考えます。その意味でも、道徳性研究会が発展し学会としてスタートすることは、たいへん意義のあることです。より多くの人々の協力と参加を得て、道徳教育の在り方について、ひいては子どもたちの幸せと社会の発展について、議論しあい、語り合う場をつくっていききたいものです。

6月16日に、本学会が神戸親和女子大学で開かれる予定ですが、できるだけ多くの方の参加を得て、日頃の実践・研究について活発な発表・討論がもたれることを期待しています。私事ながら、本学もこの4月大学院（心理臨床学専攻・教育学専攻修士課程）が開設され新校舎もできました。この学会をこの新研究施設で開催できることを、光栄に存じます。みなさまの来学を楽しみにお待ちしております。

（日本道徳性発達実践学会副理事長）

#### 「道徳教育の発展のために」

東京都大田区立東浦中学校 教頭 松尾廣文

新しい学習指導要領完全実施の年を迎えました。ひと足先に、道徳は新学習指導要領で行われているのですが、各校では、様々な実践が行われていることと思います。

東京都の道徳教育研究会調査部が、都内の各区、各市で道徳教育に中心的な役割を担っている教師への意識アンケートを平成10年度、11年度に行いました。

実は、私が主担当でしたので、その結果は、様々な研究会で発表させてもらっているのですが、多くの教師が、今後の道徳教育の課題として掲げているのは、体験学習との関連と、道徳の時間の指導方法の工夫でした。

体験活動との関連では、まるで特別活動の発表会かと思ふような道徳の研究発表会が多々見られます。

座学を廃した道徳教育を中教審が提起したのを受けてのことですが、今後、補充・深化・統合する時間として、道徳授業の展開にどのように体験を生かしていくか、または、道徳の授業をどのように体験学習に発展させていくかといった検討が必要になると思います。

総合的な学習の時間を含む体験活動への発展を視野に入れて、今、モラルジレンマの実践は行われつつありま

す。

また、都の道徳授業そのものに対する教師の意識では、指導方法の工夫が必要とは言いながら、具体的な指導方法の名前が提示した人は、ごく少数でした。

その数少ない具体名にモラルジレンマの名が登場しているのです。

新学習指導要領では、外部指導員の活用も明記されています。勿論、これは、教師とのT.Tを念頭に据えた指導形態を意図しているものであり、そういう意味でも、モラルジレンマの活躍する場面が増えたと思います。平成12年の「道徳教育推進状況調査結果」（文部科学省）では、道徳の時間の評価として、道徳の時間を「楽しいあるいはためになると感じている」児童・生徒は、加齢とともに、減少しているとの報告も見られます。

児童・生徒の発達を考えると、先生のお話中心ではなく、生徒が、討論の中で、価値を見つけ、高めていく、楽しい指導形態が是非とも必要だと思います。

本学会がこの時期、道徳性発達研究会から発展し、立ち上がったのも、こういう時流の中で、重要な意味をもつと考える次第です。

（道徳性発達実践学会副理事長）

#### 「日本道徳性発達実践学会発足を祝う」

石川県教育センター 堀田泰永

私がモラルジレンマ授業を知って15年ほどたちます。最初に知ったきっかけは、書店で荒木先生のご著書「道徳教育はこうすればおもしろい」を偶然見つけたことでした。タイトルに引かれて手に取ったのですが、中に掲載されているモラルジレンマ資料の新鮮さに引かれていきました。それ以降、兵庫教育大学の荒木研究室や道徳性発達研究会で学ぶ中で、徐々にではありますが、モラルジレンマ授業の意義、そしてコールバーグ理論について分かってきたような気がします。

最近、いろいろな所でモラルジレンマ授業について話す機会があります。活発な授業の様子や資料のおもしろさ、授業の進め方などは、VTR等を通して伝えることはできるのですが、理論や授業のねらい、発問のねらいなどは、なかなか伝わっていないのが現状です。15年前、自分が初めてモラルジレンマ授業を知った時もそうであったように、学校現場の先生方は、討論型の授業であり、子どもたちが活発に話し合えそうだということにだけ目がいくようです。

学会設立にあたり、道徳性の発達の概念、モラルジレンマ授業の目的、そしてそのための授業方法についてより深め、広げていければと思っています。

（道徳性発達実践学会副理事長）

#### 2002年度版（第14号） 巻頭言

2003年2月24日 教育方法講座 荒木紀幸

今は寒いので、朝早くに起きて散歩をしないのですが、暖かい季節になると私は、早く起きて、近くの田んぼまで出かけて、散歩をします。田んぼでは、必ずといっていい程、毎朝出会う人がいます。それは米作りをされている農家のAさんです。稲のそばに生えている雑草を引き抜いたり、肥料を田んぼに蒔いたり、土手に生えた雑草を草刈り機で刈っていたり、薬剤をまいたり、毎日何かしらの仕事をされています。そのうちに、Aさんの田んぼは、稲が上下左右に一定間隔で整然と並んでいて、手入れが行き届いているなど分かるようになりました。次はどんなことをされるのか、次の朝がとても楽しみになり、散歩する楽しみが一つ増えました。

毎朝散歩をしているうちに、田んぼにも色々あることに気がつきました。稲のならば波打っていたり、田んぼの所々で、雑草の固まりが稲よりも高く茂っていたり、不要な水が溜まっているところが見られるなど、いかにも手抜きしているな一と思えるほどの違いがはっきりと見えてきました。

「毎日やるのがよくありますね。たいへんですね。」と私が声をかけますと、『先生、「こめ」を漢字で書くと「八十八」と書きます。これは八十八回もというたいへん多くの手間をかけないと「よい米」はできないということです。』とAさんは教えてくれました。この農家の方のお米にける細やかな愛情はことばで簡単に表せないくらい大きいことが分かります。教育もまさに子どもを愛する気持ちが大きくその成果に影響します。親や教師が子どもとどう関わるか、どう手助けするかは子どものその後の成長に大きく影響することを身近な生活の中に見いだすことができました。

しかしそれと共に、持ち主からこまめに手入れを受けていない稲もそれなりに天に向けてまっすぐ空を突き刺すように育っているようすを見ていますと、稲のもつ生命力、しっかり生きようとする力もまたすごいものだと思います。教育もその子のもつ生命力が成長の先を大きく左右します。私たちが携わっている道徳教育はまさに、他律的な生き方から自律的な生き方に子ども自身がどう変っていくか、そのことに教師はどう関わり、援助できるかを大きな問題としてとらえています。

こんなこともありました。「最近生えてくる雑草は自分たちの小さかった頃によく見かけた雑草とずいぶん違っています。それはどうも自分たちが蒔く肥料と関係しているのかも知れません。肥料は主に外国産のものを使っています。牛たちが食べる牧草に外国の雑草が混じって日本にやってくるからでないか」と言うのです。こんな所にも国際化や異文化の波が押し寄せているんだとつくづく考えさせられたことがあります。

台風のような強い風が通りすぎた翌朝、田んぼに出か

けますと、Aさんがおられて、栄養剤をまいて稲の穂先や葉っぱの手入れをされていました。稲は折れたり、倒れたりしている様子でありませので、「何があったのですか」とたずねますと、「葉っぱの先が少し茶色いでしょう。あちらの田んぼの稲や、その田んぼの稲の色が他と比べて少し茶色いでしょう」といって説明を受けるのですが、よく分かりません。そこで近づいて見て、始めて稲の葉の先がすれたように傷んでいるのが分かりました。鍛えた眼は少しの変化も読みとれるのだなと感心させられました。外国産の雑草に気づいたり、少しの稲の色の変化をも読みとったり、玄人の眼は素人とは全く違うということが分かりました。米への愛情がそのように眼を鍛えているのだということもよく分かりました。

私たちが教育の玄人として、子どもの道徳性の変化や発達の芽をどれほどしっかり看取る力を身につけているか自問し、眼を鍛える努力をしなければならぬと思えます。道徳教育は国の重要政策として常に取り上げられています。広く日本を見回してみると、道徳教育そのものの実践は残念ながら心許ないものがあります。その意味でも私たちの日本道徳性発達実践学会の発足は道徳教育の活性化に大きく貢献するものと期待されているところです。皆さまどうぞまわりに呼びかけ、一緒に参加し、活動する仲間を増やしていきましょう。

本学会の副理事長、山根耕平先生が本年4月より、神戸親和女子大学の学長に就任されました。慶賀なことです。皆さんと共に祝いし、今後のご活躍をお祈りします。

(日本道徳性発達実践学会理事長)

### 2003年度版(第15号) 巻頭言

2004年2月24日 教育方法講座 荒木紀幸

第15号の道徳性の発達に関する研究年報をお届けします。これまで冊子としてこの本を刊行してきましたが、今回から体裁を改めてCDの形で皆さんにお配りします。

文部科学省は平成13年度の事業として「心のノート」を作成し、全国のすべての小・中学生、1200万人に配布しました。翌年からは毎年450万人近くの新学年の児童生徒に配布しています。文部科学省の「心のノート」にかかる意気込みが伝わってきます。「心のノート」の作成に関わった前教科書調査官の押谷由夫氏はかつてないベストセラーとこの出版を絶賛され、子どもたち一人一人の『一生の宝物』となるようにしようと訴えています。

人間のあり方や生き方の教育に強い関心をもっている我々にとって、この「心のノート」の運用、活用、それがもたらすことならについては大きな関心事です。

さて「心のノート」の手引書にはその趣旨と特徴の中で、「心のノート」作成の基本的な考えとして、次の4点が上げられています。

- 子どもが道徳性を発展させる窓口を示したものの、
- 子どもの日常生活や全教育活動を通じて用いるもの、
- 教科書や副読本に変わるものではないもの、
- 学校での多様な教材開発を促すもの、

『この基本的な作成意図から、「心のノート」は道徳の時間で扱っている道徳の内容をわかりやすく表したものであり、子どもたちが身に付けるべきものである。しかし「道徳の時間」の副読本でも、補助教材でもない。日常生活や全教育活動を通じて行う道徳教育の充実を図るための教材として作成したものであり、子ども自身の道徳の学習の日常化を目指したものである』と説明されています。このように「心のノート」の位置づけは実に曖昧です。

また、「心のノート」には次のような性格があるとも述べています。

- ①児童生徒が道徳的価値について自ら考えるきっかけとなり、自ら学習するとき用いることができる自学自習用の冊子としての性格
- ②児童生徒が自己の生活や体験を振り返り、自らの心に記録することができる「生活ノート」的な冊子としての性格
- ③保護者が見たり、記入したり、話題としたりすることで、学校と家庭が連携して、児童生徒の道徳性を育成するうえでも有効に活用される、いわば学校と家庭との「架け橋」的な冊子としての性格

第一点目の道徳的価値に気づくこと、つまり子どもが道徳的な価値の全体像を知る(道徳性の発達?)ことの意義は大きいと考えます。そのためにも編集意図にあるように、道徳の内容(徳目)を子どもにわかりやすく表すことは納得できるものです。しかしそのことは、裏返すと思の固定化、つまり自由な発想の抑制につながるおそれがあります。この点については今後検討していくことが必要でしょう。

第二点の自己の生活や体験を見つめ、記録するという「生活ノート」としての活用はいわゆるポートフォリオ的な意味や自己概念の形成としての意味を認めることができます。自分について適切な時期にまとめておくことの意義は大きいと思います。しかし、「心のノート」はノート代わりに気楽に使えるというふれこみの割には書くスペースが小さく、思いをしっかりと書けるようになっていません。メモ程度では自己の内面を描写したとは言えないでしょう。我々が実践しているモラルジレンマ授業ではしっかりと子どもたちに考える時間をとるので、年齢に関わらずB5版程度の「道徳ノート・判断理由づけカード」だと、用紙全体を使って自分の考えや意見をしっかりと書くことができます。

第三点についても親と学校の架け橋として「心のノート」を有効に活用することの意味はよくわかります。しかし「生き方」は極めて個人的な問題でもあります。個

人の内面に関わることを好んで子どもたちが親や教師に教えるでしょうか？ 特に小学生高学年や中学生では大人に見せることを前提に本音を語らせることには無理がありすぎると思うのです。

このようにこれら3つの性格の中や間にはさまざまな問題が介在しているように思われます。この他にも様々な問題や批判が寄せられています。たとえば、江部満氏（明治図書、2003）は、提出されている問題点や批判を次のように述べています。

- なぜ今「心のノート」かについて批判的な声として、
- ①教育基本法の改定問題と関連がある、
  - ②「心のノート」という正体不明の「テキスト」、
  - ③本の意図はどこにあるか見定める必要あり、
  - ④国定教科書の再登場か、
  - ⑤「心の教育」は旧態の道徳教育と新顔の心理主義を合体させたもの、
  - ⑥「心のノート」は地面や足を軽視し、空や雲、風船やタンポポの綿毛（わたげ）など、空中に浮かぶもののイメージによって、非現実的な雰囲気をかもし出している、などがあります。

せっかく多額のお金を掛けて作った「心のノート」をどのように子どもたちに提示すれば、子どもたちにとって価値ある道徳の教材となるのでしょうか？ 既に指摘した問題点の中に、解決の鍵が隠されているように思うのですが・・・それらについては、これから検証してみる値打ちがあるものと思います。また、「心のノート」とよく似た扱いのものが既にいくつか教育の場で開発され、利用され、成果をあげています。一つは兵庫県の試みであり、いま一つは大阪府吹田市の試みであります。

阪神・淡路大震災（1995）、神戸少年事件（1997）を経験した兵庫県は、「心の教育充実に向けて」を刊行し、具体的な実践として兵庫県教育研修所に「心の教育相談センター」を設置し、「生命の尊さを実感し、愛情豊かに他者と共存し、個性的に社会を生き抜く力を育むこと」を教育目標に掲げて、「心の授業」を実践しています。そこでは、主に「ストレス・マネジメント教育」「人間関係体験」「自己発見・自己開発」をベースをおいて始めており、成果が報告されています。それらが扱っているテーマや内容で「心のノート」との重複が見られますので、『心の授業』の導入、展開、終末での活用で成果が十分期待できると思われます。

文科省の示す「心のノート」の内容は教師の周りにいる具体的な児童や生徒を想定したものではありません。その点が利用の限界でもありましょう。また教師にとって利用の必要感が少ないこともあるでしょう。その点大阪府吹田市教育委員会（2000）が独自に作成した中学校道徳教育副読本「いきいき」には育てたい教師の願いが詰め込まれています。吹田の子どもにとって切実な問題が扱われています。そこには手作りの力強さがあります。

「心のノート」が机の引き出しに終い込まれ、また本棚の飾りとならないことを望んでいます。子どもたち一人一人の『一生の宝物』となるには、教師側に、かなりの知恵と工夫が必要になると思われます。

ともあれ、学会でもこの問題を取り上げて具体的に検討し、実践について提案や改善をしていくことが急務であろうかと考えます。

（日本道徳性発達実践学会理事長）

「道徳性の発達に関する研究年報」は、この第15号（2003年版）を持って役目を終えることになりました。学会誌、「道徳性発達研究」については、内山伊知郎編集委員長のもとで、第1号を2005年には発行できるよう準備を進めているところです。どうぞご期待下さい。

#### 道徳性の発達に関する研究年報 編集後記 with big news 2004年3月 野本玲子

今年も桜の開花が早いそうです。出会いの花だった桜が、最近では別れの花になってきたような気がします。

おかげさまで、日本道徳性発達実践学会及び道徳性発達研究会の1年間の研究のまとめとして、本年報を編集することができました。夏の京都大会でご発表いただいた先生方をはじめ、全国各地からご参会いただいた方々、貴重な研究実践をお寄せいただいた方々、理事、編集委員会、次年度大会実行委員会、事務局の方々等、学会・道徳研活動に関与して下さったさまざまな方のお力によるものですが、年度末の大変ご多忙中、原稿ご執筆をお引き受けいただき、本当にありがとうございました。今回は初めて年報のCD化ということで挑戦しましたが、知識も経験もなく、戸惑うことだらけでした。ご協力をいただいたすべての方に心からお礼を申し上げます。

さて、本年度は、日本道徳性発達実践学会と、その母胎である兵庫教育大学道徳性発達研究会にとって、三つの意味で、大きな節目の年となりました。

一つめは、昨年夏の京都大会が第20回の道徳性発達研究会であり、その記念に「モラルジレンマ授業研究の原点から21世紀の生き方教育を考える」というテーマでシンポジウムをおこなえたことです。当初の先生方の熱い想いに改めて触れ、みなさんと共に今後のあり方を考えさせていただくことができました。本CDにも資料として第1号年報の巻頭言等を載せております。温故知新。また、みなさんのおかげで、台風の接近にもかかわらず、北海道から九州まで各地から200名近いご参加をいただき、盛大な大会となりましたことを改めてお礼申し上げます。

二つめは、その記念大会を区切りに、なじみの京都教育文化センター大ホールを旅立つことです。来年度から

は、ニーズに応じたプログラムを組んでいく可能性を含めて、実行委員会形式でそれぞれの大学等を会場とし、学会としてさらに発展させていきます。古くから関わってこられた方も学問上一層研究を深められ、初めて参加される学校や矯正施設の現場の先生方にも実践に役立ちご満足いただけるよう、みなさんのご意見を伺いながら運営していきたいと考えております。

今年の夏の大会は姫路獨協大学で開催されます。本CDにも、実行委員長の平岡先生からステキな姫路へのお誘いがありますので、ぜひご覧ください。みなさんがご参加され、姫路でお会いできることを楽しみにしております。

三つめは、本学会理事長、研究会の代表であり、私たち事務局のゼミ生のご指導をいただいている荒木紀幸先生が、この3月で兵庫教育大学を御退官され、神戸親和女子大学の教授とされることです。昨年度の年報作成時には、倉戸ツギオ先生の突然のご訃報に接し、あまりの驚きと悲しみに胸がいっぱいになりました。が、荒木先生は倉戸先生の御遺志も継がれ、2003年7月には、荒木先生・倉戸先生編『健康とストレス・マネジメント—学校生活と社会生活の充実に向けて』を完成されました。神戸親和女子大学におかれましては、現代的課題にも対応した道徳教育の拠点を築いていかれるように伺っています。(神戸親和女子大学内 荒木研究室 078-591-3732) まだまだ夢をいっぱい持っておられる元気な荒木先生に、いつも勇気づけられます。道徳性発達研究会は、学会兵庫支部活動とも合わせて、月1回程度、親和女子大学でおこなっていく予定です。近辺の先生方でご関心のある方はぜひご連絡下さい。

最後に私ごとですが、大学院入学前年から道発研の大会に参加させていただきましたが、この3月で荒木先生と一緒に(?)兵庫教育大学を卒業いたします。荒木先生のご指導のもと、貴重な経験をさせていただき、本当に充実した研究生活を送ることができました。最後のゼミ生であったことを心から幸せに思っています。また、この学会運営、事務局の仕事をさせていただいたことで、全国のすてきな方々とお会いでき、魅力的なお話を伺えたことを何よりも感謝しております。事務局の人数も減り、行き届かないことも多くて申し訳ありませんでしたが、あたたかく支えていただき、本当にありがとうございました。なお、私たちのひとつ下の学年が来年度の学会事務局となります。村上正樹委員長、原田浩光副委員長です。とても頼りになる方々ですが、兵庫教育大学内に荒木研究室がなくなることで、諸般の事情からますます困難なことも増えるかと思えます。なにとぞよろしくご理解の上、ご協力いただきますよう、この場をお借りして私からもお願いいたします。

日本道徳性発達実践学会のますますのご発展と、会員のみなさんのご活躍、ご多幸をお祈りしております。ありがとうございました。

#### 【引用文献】

- 荒木紀幸編 1990 「道徳性の発達に関する研究年報」 1989年度版 全140頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1991 「道徳性の発達に関する研究年報」 1990年度版 全195頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1992 「道徳性の発達に関する研究年報」 1991年度版 全154頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1993 「道徳性の発達に関する研究年報」 1992年度版 全140頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1994 「道徳性の発達に関する研究年報」 1993年度版(第5号) 全154頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1995 「道徳性の発達に関する研究年報」 1994年度版(第6号) 全224頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1996 「道徳性の発達に関する研究年報」 1995年度版(第7号) 全232頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1997 「道徳性の発達に関する研究年報」 1996年度版(第8号) 全259頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1998 「道徳性の発達に関する研究年報」 1997年度版(第9号) 全243頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 1999 「道徳性の発達に関する研究年報」 1998年度版(第10号) 全339頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 2000 「道徳性の発達に関する研究年報」 1999年度版(第11号) 全321頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 2001 「道徳性の発達に関する研究年報」 2000年度版(第12号) 全315頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸編 2002 「道徳性の発達に関する研究年報—学会発足記念号」 2001年度版(第13号) 全253頁 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 道徳性発達研究会事務局編 2003 「道徳性の発達に関する研究年報」 2002年度版(第14号) 全189頁 日本道徳性発達実践学会, 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 道徳性発達研究会事務局編 2004 「道徳性の発達に関する研究年報」 2003年度版(第15号) CD版(15ファイル), 日本道徳性発達実践学会, 兵庫教育大学教育方法講座荒木研究室
- 荒木紀幸 2005 「研究会の歩み」 道徳性発達研究 第1巻 第1号 37-43. 日本道徳性発達実践学会
- 荒木紀幸 2023 在籍した開設10年までの神戸親和女子大学大学院との関わりを振り返って 神戸親和女子大学大学院研究紀要 第19巻 1-27.